

THIS IS シンデレラ

パトラッシュ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

誰もが憧れ夢見るアイドル

その礎を作り上げ、華麗な歌声とダンスで世界を席巻した1人の人間がいた。

その人間は伝説となり、今まで偉大なアイドル達の間で脈々と語り継がれる。

そして、彼女は日本と呼ばれる国で生を受け再び伝説を作るためにシンデレラガールズと呼ばれる少女達を導きステージに上がる。これはそんな物語である

プロローグ

lesson lesson lesson lesson lesson lesson lesson lesson lesson

9 8 7 6 5 4 3 2 1

目

次

76 67 59 51 40 32 25 17 10 1

プロローグ

かつて全世界を沸かせたエンターテイナーがいた。

その踊りは人々を魅了し、カリスマ性溢れるダンスは見るものを虜にした。

人々はそんな彼に畏敬を込めてこう呼ぶ『キング』と。そう、全世界を震撼させた彼にこそ相応しいと誰もが認める称号だ。

そして、その人物は伝説となり、今を輝くアイドル達にもその存在は今日まで語り継がれている。

この話はそんな彼（彼女）が日本と呼ばれる国で新たに生を受け、シンデレラを夢見る少女達を導く、そんな夢のような、おとぎ話である。

東京、渋谷。

この日、渋谷にある大画面テレビにはある広告が掲示されていた。
シンデレラプロジェクト。

この広告は駆け巡る様に夢見る少女達の目に飛び込んできた。自分達が知らない夢の世界、そんな、夢の世界への足掛かりになるプロジェクト。

そんな渋谷の街の真ん中に少女の姿があつた。

綺麗な肌に透き通る様な眼差し、そして、目を引く様な綺麗で長い黒髪を束ね、容姿は外国人とのハーフなのだろうか綺麗で端麗な顔つきをしている上に、お洒落な黒いハットを被つていた。

「さて、今日もJapaneseにshowを魅せるとしようかな」

音楽を流す機器を設置して、黙々と作業する1人の少女。

そして、音楽機器の設置を終えると彼女は静かに立ち上がり、持つてきた自作で作詞作曲した音楽を流しはじめる。

辺りには不思議そうにそれを見守る人々が自然と足を止めはじめていた。

そして、音楽機器からはだんだんとリズム感のある曲が流れ始め

る。

それに呼応する様に彼女も踊りはじめた。

「N o o n e c a n s t o p m e ♪」

キレのある不思議なダンスと透き通るような歌声は人々の足を止めるのにそう時間はかからなかつた。

革靴のスキル音が辺りに響く、それは少女が歌うにはあまりにも逸脱した曲だつた。

しかし、それにもかかわらず、彼女がその曲を歌い踊るのが至つて自然であつた。とても、一般の人じや真似できないようなそんな独特な踊り。

滑らかで柔らかい関節の動き、そして、回りステップを踏むそのダンスはスパンツと音を立てるかのような鋭い動きである。

気がつけば周りには数多くの人だかりができていて、彼女の歌声とダンスを一目見ようと集まつてきていた。

気品があり、それでいて眼が覚めるようなダンスは彼等には眩しく尊いものを見るような錯覚さえ思ひ起こさせる。

曲が一通り終わると、彼女は華麗に何回にも及ぶターンを決めてポーズを取る。

「T h a n k y o u s o m u c h」

そして、彼女は被つていた黒いハットを外すと深いお辞儀をして、足を止めて見てくれた人々に感謝を述べる。

気がつけば、周囲にはかなりの人だかりができていた。

しかし、彼女にとつて見ればそれが自然で当たり前な事のような振る舞いである。拍手喝采がいたるところで巻き起こる中、彼女は淡々と設置していた音楽機器を片付けはじめた。

「s o r r y、今日はこれで打ち止めダヨ、また来週辺りにでもc o m e b a c k するからその時にでも来てください」「えー1曲だけー?」

「もつと見てたいのに残念だぜ、あんた超クールだよ!」

そう言いながらにこやかな笑みでそんな彼等に応える彼女。

ひと段落ついたのちに彼女は再び、設置した音楽機器を再び回収し

はじめる。

すると彼女の背後からに黒いスーツを身に纏つた1人の男性が近寄つてくると静かに彼女の肩を叩いた。

肩を叩かれた彼女は首を傾げたまま肩を叩いてきた人物に振り返る。

「あの！ 私、こんなものなんですが！ 先ほどのダンス！ 歌！ お見事でした！ 良ければウチの事務所に…」

「What? …コレは芸能プロダクション？」

「はい！ 良ければ是非、貴女にウチの事務所に入つて頂けたらなど！」

その言葉を聞いた彼女はハアとため息を吐く。

どうやら、スーツを着たこの男性は芸能プロダクションのスカウトの方のようだ。

最近はこういつた勧誘が彼女が路上でダンスをするたびに増えてきた。

勧誘される事は別に嫌いではない、嫌いではないが自分の卓越した技術にあやかろうとする魂胆が見え透いていてそれが彼女には面白くなかった。

まず、彼等が真っ先に挙げてくるのは容姿とダンス、歌声ばかりだ。それが彼女には面白くなかった。彼女にとつて見れば卓越したダンススキルや歌声は前世で極めたものだ。

それこそ、これ以上極める部分が無いくらいに大勢の観客の前で歌い踊りを披露したのだから。

「No、他を当たつてください、私は興味が無いので」

「そ、そんなことをおつしやらず！ 私は貴女のダンスに惹かれて…」

「ハイハイハイ、そこが different！」

「え？」

「この話はこれでおしまい、see you」

そう告げると彼女はそそくさと立ち上がりその場を後にしようと踵を返す。

それを見ているだけのスカウトは啞然とした様子で彼女の背中を

見つめる。そして、しばらくして我に帰るとすぐに彼女の背中を追いかけ呼び止めた。

側から見れば不審者極まりないが、彼女は毅然とした態度で呼び止めたスカウトの男性にこう問い合わせる。

「んー？ まだ何か？」

「せ、せめてお名前だけでも」

「m y n a m e ? o h : o k !」

確かに名乗らずさつさとその場を去るのは申し訳ない。

彼女は勇気を持つて自分を呼び止めてきたスカウトにそう感じ、彼女はとりあえず名前だけ教えてあげることにした。

すぐに持っていた鞄から彼女は色紙を取り出すとサラサラッと手慣れた様子で名前を書いていくとそれを彼に手渡してあげる。

そこに書いてある名前を彼はゆっくりと読み上げた。

「舞・K・寂園…さん？」

「Y E S ! それが私の n a m e だから覚えておいてね！」

そう告げる彼女は再びスラッシュとした長いモデルのような足を動かし、手をひらひらとさせながらその場を後にしあじめる。

その色紙を見つめるスカウトは彼女の後ろ姿を見つめながら色紙に視線を落とした。

この色紙の文字、そしてあの踊りを目の当たりにして気づく人間は気付くものだ。それが、長年スカウトをしていたベテランなら尚のこと。

「いや…、まさか、そんなこと…」

彼は思わず、目を丸くしながらその色紙を見つめる。

あのキレキレのダンスにも驚いたが、あの立ち振る舞い方は尋常じゃない、間違いなくあの歌声でのダンスを振る舞えば音楽チャー
トのトップはすぐに取ってしまうだろう。

カリスマ性もさることながら人々を自然と集めてくるスキルが卓越していた。普通、路上で一曲ダンスと曲を披露するだけであれだけの人だかりはできない。

全米デビュー…それすらもおそらく可能どころか全世界を席巻す

る事だつてもしかしたら可能だ。

そんな、人材が渋谷のど真ん中で埋もれてしまつてゐるそれはあまりにも大きな損失だとスカウトはそう感じていた。

そして、そんなスカウトに声をかけられ、渋谷を後にした彼女はどう言うと…。

「んー、my homeに飾るflower…どれをchoiceするか迷うわね」

自宅に帰る前に立ち寄つた花屋でいろんな花を見つめていた。

色とりどりの花はどれも素敵だから迷うのも仕方ないが、それにしてもどの花を部屋に飾るのか彼女は困り果てていた。

花言葉というものもあるし、できれば自宅に飾るなら綺麗で縁起が良い花を飾りたい。

そんな、花を見つめている彼女の姿を見かねた1人の綺麗で長い黒髪の少女が舞に声をかけてきた。

「お客様？ 何かお探しですか？」

「oh! just timing! 実はyouに頼みがあるんだけれど…、縁起が良くてbeautifulなflowerってないかしら？」

「え、縁起が良くて？ ビューティフル？」

「そうそう！ beautiful! オススメがあれば是非buyしたいんだけど」

そう告げる舞は柔らかい笑みを浮かべて店員である少女に頷く。

店員である彼女はうーんと思案するとある花を選び、寂園に手渡した。

「これはどうですか？ すずらんつて言うんですけど」

「oh…、小さくてcuteな白い花ね」

「花言葉は幸せの再来、純粹、純潔つて言葉なんですけど、お気に召しましたか？」

「YES! これに決めたわ、thank you」

そう言つて、寂園は彼女から花を見繕つてもらい、それを梱包し持ち運びやすいような形にしてもらつていく。

そして、しばらくしてその店員の顔をジツと見つめると柔らかい笑みを浮かべてこう告げ始めた。

「貴女、良い面構えしてるわね、年は？　見た感じ私と年が近いみたいだけれど？」

「え？　えーと…」

「y o u r n a m e 聞かせて貰えるかしら？」

そう言うと寂園はまっすぐに彼女の眼差しを見つめて問い合わせる。綺麗な黒髪の長い、容姿端麗な少女。しかし、花を見繕つてくれた時に寂園はふと感じとった。少女の中に燻る開花しそうなそのスター性を。

すると、名を寂園から問い合わせられた少女は渋々ながらこう告げはじめる。

「渋谷…、渋谷凜です」

「o k！　リンね！　覚えたわ！」

そう告げる寂園はにこやかに笑うと手を差し出して握手を求める。それを見た渋谷凜と名乗った少女は困惑したような表情を浮かべて寂園から差し出された手を見つめていた。

寂園は首を傾げて何でもないといった具合に凜にこう告げる
「ただの shaking hands。何も取つて食べようとか考えてないわ」

「あ、いえ、すいません、突然の事だつたのでちょっと驚いてました、
はい、よろしくです」

「私は舞・K・寂園、舞つて呼んで頂戴、マイケルでも構わないけど」
そう笑みを浮かべて告げる寂園の言葉に目を点にする凜。

女性なのにマイケルと呼んでほしいとは変わつた趣向であるし、何だかおかしな気がした。

「女性なのにマイケル？」

「私はそつちが everyone に言われ慣れてるからね、マイケルの方が好きなのよ」

寂園はそう凛に告げるとクスリと小さく微笑んだ。

そして、握手を終えた彼女は凜の肩をポンポンと叩くと思い出した

ようになんな話をし始める。

「あ、そうだ、素敵なflower shopをchoiceしてくれたお礼をさせて欲しいんだけど店前のone space貸してくれるかい？」

「え？ あの…」

「こんな素敵なflower shopがあるので素通りするpeopleはわかつてないね、Timeはとらせないから、ね？」

そう告げる寂園は軽くウインクをして、凛に店前を使つてもいいかお願いをし始める。

少しは花を移動させればそれなりのスペースを確保することはできるが一体彼女は何を考えているのか凛にはよくわからなかつた。「わかりました…それじや少しだけ」

「thank you、それじやすぐ取り掛かりましょ？」

そう言うとすぐさま花を移動させてスペースを確保し始める寂園と凛の2人。

そして、ある程度のスペースが確保できたところで寂園は音楽機器を設置し始めた。

「本来ならtodayは一曲onlyのつもりだつたんだけどね、お礼も兼ねてやらせて貰うわ」

「…はあ…」

「まあ、こんなものかしら、リン、それじやちよつと離れてて？」

そう寂園が告げると凛は首を傾げたまま、音楽機器を設置し終えた彼女の側から離れる。一体彼女が何をするのか全く予想もつかなかつた。

すると寂園はいつものように音楽を流しはじめるとイントロに合わせてハットを深く被り静かに下を向く。

そして、音楽が始まると同時に滑らかな英語で歌を歌い始め、鋭いダンスが繰り広げられる。

「♪♪♪♪♪」

足は滑らかに動き、キレの鋭い動きがそれを目の当たりにしていた凛を釘付けにした。

歩く人々は次から次へと足を止めはじめた。花屋の前でハットを被る少女の歌声とそのダンスを見て自然と身体が止まってしまった。

足の動きもそうだが、彼女の踊るダンスは次元が違っている。

凛は目の前の光景に思わず声を失いのめり込んでいた。

「a r e y o u O K?」

いつの間にか花屋には人だかりが出来ていて。

英語で歌い凄まじいダンスを披露している彼女を一目見ようと集まつた人達ばかりだ。皆が気がつけば、彼女が歌う曲と共に身体が上下に動いている。

そして、寂園のダンスは佳境に入る。

「あれは…」

それは、まるで歩いているように見えるのに全くその場からうごかない、それどころかちよつとづつ後ろへと下がる動き。

綺麗なムーンウォークであつた。彼女がやるのが至つて自然な様にいや、それどころかムーンウォークが彼女の物のような錯覚さえ感じてしまう。

そして、曲が終わると同時にビシツとキレのあるポーズで終える寂園、寂園の周りにできた人だからからは大きな拍手が巻き起こつていった。

「…すごい」

思わず、凛の口からそんな言葉が飛び出す。

何もないところから歌とダンスだけでこれだけの人をかき集めてくる。

ダンスを終えた寂園はにこやかな笑みを浮かべながら握手を求めてくる人達と手を握りしめていた。もちろん、花屋の宣伝も忘れずにしている。

そのおかげか凛の働いている実家の花屋には人が殺到してきた。うつて変わつて大忙しだ。

ひとまず、それがひと段落ついたところで凛は改めて、設置してある音楽機器を回収している寂園の元へと足を運んだ。

「いやー、大盛況だったね、f l o w e r s h o p 」

「し、死ぬかと思つたわ。舞？ 貴女何者？」

「んー？ そうだね、エンターテイナーって言つておこうかな」

「エンター…テイナー？」

「そうそう、エンターテイナー、良ければ凛。興味もつたなら私がいろいろと教えてあげようか？」

そう告げる寂園は優しく笑みを浮かべていた。

あの凄まじいダンスとキレのある動き、そしてあの歌声を目の当たりにした凛はそれを鮮明に思い出す。

一瞬にして自分の家の前が気がつけばこの人のダンスや歌声でア

イドルのステージのようになつてしまつた。

「…まあ、連絡先は教えておくから興味があれば連絡 p l e a s e ネ、それじゃ私は行くよ、可愛い f l o w e r。 t h a n k y o u ネ」

そう告げる寂園は軽く花の匂いを嗅ぐと凛に名刺のようなものを

手渡し、ひらひらと手を振りながらその場を後にする。

これが、渋谷凛とエンターテイメントを全て極めた寂園との邂逅であつた。

とあるマンションの一室。

寂園は自分のベットの上で携帯端末を使い音楽を聴いていた。新しい作詞作曲をする為の参考にと聴いているのは洋楽ばかりである。たまに口ずさんでみたり、気になる、もしくはパツと思い浮かんだフレーズを紙に書き込んでいく。

そして、暇があれば部屋の中で少しだけステップを踏んで確認。「That's right! 思った通りね！」このフレーズは使えるわ」

寂園はグッと嬉しそうに小さくガツッポーズ笑みを浮かべてメモに気に入つたフレーズを書き込む。

新しい物、新しい音楽、そして、改めて音楽やダンスと向き合うだけ新しい発見がここ最近になつて増えてきた。

そんな時、音楽を聴いていた寂園の携帯端末に着信が入る。

「ん？ 誰かしら？」

その携帯端末を確認する寂園は表示された名前に目を丸くする。

その着信は先日、花屋で知り合つた渋谷凛からのものだつた。寂園は首を傾げてその着信に出る。

「hello もしもし？」

『あ、舞？ 凛だけど』

「oh、凛、掛けてくれたんだねー。なになに？ どんな
requirement?」

そう告げる寂園はどこか楽しそうな声でそう凛に問いかける。

すると、電話先の凛は明るく問いかけてくる寂園に静かに話をしあじめた。

声色からしてどうやら相談事のようだつた。

『実は最近、私、アイドルをやらないかつてスカウトを受けてて』

『oh、アイドル！ 良いじゃない、凛ならきっと上手くいくよ』
『いえ、その：私、その話を一度断つちゃつたんだよね』

「w h y? どうしてまた」

凛がアイドルのスカウトを断つたという話を聞いて首を傾げる寂園。

彼女の場合、アイドルを断る理由は無いような気がする。少なからず寂園はそう思っていた、何故なら、花屋で寂園がダンスを披露したその日、聞き入っていた凛の姿を見ていたからだ。

しかし、次に凛の口から寂園にこんな話が飛び込んでくる。

『先日、見せてもらつた舞のダンスに正直、釘付けになつちゃつて…、あのレベルのダンスは今の私には真似できないって…』

「o h…、なるほどネー」

『それに実家の花屋の仕事も手伝わないといけないし、あ、先日の舞の歌とダンスで新規のお客さんがたくさん増えたんだ！ありがとう！』
[I t, s n o t a^氣 b i g d e a l, d o n^な, t w o r r^い y a b o u

まあお客様が増えたのなら良かつたわ』

そう電話で告げる寂園はにこやかに笑っていた。

しかし、気になるのは相談を持ちかけてきた凛の意思の方だ。もしかしたら、自分のせいでも彼女はアイドルになるのを躊躇っている節があるのかもしれない。

すると、しばらく考えた後に、寂園は凛にこんな話を持ちかけはじめる。

「o k、凛。貴女はアイドルになりたい？」

『あ、いや、別に…。私がステージに上がつてもそこまでの技術はないし』

『そんなtechniqueは後から付いてくる、心配しなくても大丈夫よ』

『…そう、かな？』

「そんなものよ、明日空いてる？」

『え？ 明日？ まあ、夕方からなら…』

そう告げる凛の言葉を聞いて寂園は自分のスケジュール帳を確認する。

スケジュール帳を見てどうやら明日は予定は大丈夫そうだと確認

したところで、寂園は電話先の凛にこんな話を持ちかけはじめる。

「OK、それじゃ明日夕方に待ち合わせね？ 花屋まで迎えにいくわ」

『え、ええ！』

「それじゃまた明日ね、see you」

驚いたような声を上げる凛を他所に一方的に要件を伝えて、手早く慣れた様子で通話を切ってしまう寂園。

迷える子羊は導いてあげなくてはいけない。それも、迷っている原因の一端が自分であるからなおのことだと寂園は思っていた。

アイドルになるかどうか迷っている。ならば、彼女の背中を今押してあげられるのは自分ではないのかと。

「明日が楽しみね」

そして、寂園もまた、一通り音楽を聴き終えるとベットに横になり静かに眠りにつきはじめる。

渋谷凜という少女がいつたいどんな可能性を秘めた少女であるのかを楽しみにしながら…。

日は明けて、翌日。

昨日話していた通り、寂園は渋谷凜と待ち合わせしていた花屋の前に夕方ごろに訪れる事にした。

いつもの様にお洒落なハットにビシツとお洒落なスーツ姿、一般的女性がそんな格好をしていれば男装しているのかと思われるかもしれないが彼女がその格好をしていても自然に見えてしまうから不思議な光景である。

「んー…リン、もしかして少しだけ late coming かな？」

そう咳きながら、寂園は時計を確認する。

夕方ごろに待ち合わせと言つたが思いの外、彼女の姿がなかなか見えない、待ち合わせ場所が実家なので遅れる事はあまり無いと思われるが。

すると、寂園の耳に聴き慣れた声が飛び込んでくる。

「ごめん！ 舞！ 遅れちゃった！」

「ん？」

そこには手を振りながら駆けてくる制服姿の凛の姿があった。

制服を見る限り、女子高生の制服を身につけている。これから察するに学校帰りだつたという事が寂園にはわかつた。

「へイ、遅かつたじやない？」

「ごめん！ 昨日言つてたスカウトに捕まつててさ…」

「ん？ スカウト？」

「そう、アイドルのスカウト。断つたんだけど何故か学校の側まで来てて」

凛のその言葉にああ、と納得する寂園。

昨日、話していたスカウトがどうやらまた声をかけてきたらしく、それで、いつもより帰りが遅くなつてしまつたという事に納得した様子であつた。

しかし、一度断られていながらも再び声をかけてくるというのはそのスカウトもなかなか目利きだなど寂園も感心する。

さて、それはさておき、今回、待ち合わせをした本題について凛の方から寂園にこう質問を投げかけはじめた。

「それで？ 舞、待ち合わせつて今日は何するつもりで待ち合わせしたの？」

「Oh、そうだつたネ、実はアイドルになるかどうか迷つてる凛の背中をpushしにきたんだよ」

「へ？」

「だから、starに成りたいんでしょ？ とりあえずそんなヒラヒラのskirt履いてちゃダンスはcan, tだからとりあえずジャージかmovingしやすい格好にchangeしてきて」「え？ 着替えるの？ つていうかダンスつて」

そう言つて突然、着替えて来いと要望してくる寂園に凛は戸惑いながら問い合わせる。

唐突に今日、待ち合わせしたと思いきやいきなり動きやすい格好に着替えて来いと言わればそうなるのも無理はない。

しかし、戸惑う凛を見た寂園は肩を竦めて溜息を吐くと仕方ないといった具合にこう告げはじめた。

「別にリンの skirt の下に履いてる lingerie が見えて良いならそのままでもいいけど?」

「? …すぐ着替えてくる!」

それを寂園から聞いた凛は顔を真っ赤にして慌てた様に自宅へ鞄を抱えて、駆けていく。

何をするのかわからないが、スカートを履いたままで自身のパンツを晒すという醜態を公衆の面前で晒したくはない。

しばらくして、ジャージに着替えてきた凛が花屋の前で待つ寂園の元へとやつてくる。

だが、それを見た寂園はまたしても難しい顔をしていた。

「ごめん! 待たせた!」

「んー…なんかしつくり来ない、仕方ないネ」

「え? 言われた通りジャージだけど…」

「YES、そうなんだけどね…。凛、悪いけど貴女の measurements 教えてくれない?」

「へ?」

寂園の突然の言葉に目を真ん丸くする凛。

それに着替えてジャージで来たというのに何故があまり納得しない様子の寂園。そして、寂園は凛が言葉を理解していない事を察する改めてこう告げる。

「スリーサイズって言つたらわかる? 貴女の bustとかhipとかの size ね」

「は、はあ!?

「とりあえず教えて? please」

再び顔を真っ赤にする凛に至つて冷静にそう告げる寂園はメモ帳とペンを取り出して凛に手渡す。

ジャージの次はスリーサイズを教えるとなれば年頃の女の子である凛にも流石に動搖せざる得ない。

しかし、寂園は早く書いてと言わんばかりにメモ帳とペンを自身に手渡して來た。

何を考えているのか、全くわからない。寂園と知り合つてからまだ

浅い付き合いであるし、まさかスリーサイズまで彼女に教えなくてはいけなくなるとは凛には予想外であつた。

ひとまず、自身のスリーサイズを書き終えたメモ帳を凛は変わらず顔を赤くしたまま寂園に手渡す。

「へえ、なかなか size あるのね」

「どこ見て言つてるの？ ねえ、どこ見て言つてるの!?」

「H A H A H A、j o k e よ、o k、t h a n k y o u リン、とりあえず受け取つたわ」

そう言つて、メモ帳を仕舞う寂園、しかし凛はどこか納得してない様子で寂園を見据えている。

それを見ていた寂園は肩を竦めて仕方ないとスリーサイズを凛にいきなり聞いて来た理由を話しあげはじめる。

「d o n, t w o r r y これは貴女のスーツを新調する為に使わせて貰うだけだから」

「え？ スーツ？」

「そ、ジャージやお洒落じゃないでしょ？ 何事も形から入るのが

1番、頼むのは b r a n d 品だから大切に着てよね」

「ちょ！ そんな…」

「いいの、私がしたいだけだから」

そう語る寂園は笑みを浮かべて凛にウインクをする。

ジャージだと見栄えが良くないと感じた寂園は凛にスーツを新調する為にスリーサイズを訪ねたのである。

これは寂園がそう感じたからそうすると決めたわけでもちろんお金は全部、寂園持ちである。

そんなブランド物のスーツを買つて貰えると聞いた凛は訳が分からず目がグルグルと回つていた。

知り合つて間もないはずの彼女がここまで自分にしてくれる理由がわからなかつたからである。

「おつと、もうこんな時間。それじゃ凛、行きましょうか？」

「え？ 行く？ 舞、行くつてどこに…」

そう言つて、凛はいきなり手を引かれて歩きはじめた寂園に訪ね

る。

すると、凛の手を引く寂園はにこやかな笑みを浮かべて親指を立ててサムズアップしたまま、彼女にこう告げた。

「決まってるじゃない、let's dancingしによ」

「ええ!」

「へイ! TAXI!」

「ちよ! まつ…!」

驚いたような声を上げる凛を他所にタクシーを止める寂園。

トントン拍子に話が進む中、凛は寂園からタクシーに乗せられて後部座席に座る。

そして、2人を乗せたタクシーはある目的地に向かつて走り始めたのだった。

lesson 2

タクシーに乗り込んだ2人。

寂園に強引にTAXIに乗せられた凜はある場所に連れてこられることになった。

それはお洒落な隠れ家的なバー、そのバーは外国人の人々など、日本人に限らず色んな人種の人達が中に居た。

「へイ！　トム、どんな感じ？」

「上々さ、マイケル、言われた通り奥部屋は確保しといたぜ」

「t h a n k y o u、流石トムね、凜、ほら f o l l o w m e」

「ちょ！　ま、待つてよ舞！」

トムと呼ばれる黒人のバー・テンドラーと握手を交わした寂園に目を丸くする凜。

しかし、寂園はいつものようになんでもないような表情で笑みを浮かべてどんどん奥へと進んでいく。

そして、寂園がバーの奥部屋の扉を開くとそこには広々とした空間が広がっており、あるのは大きな鏡が張られているのと、様々な音楽機器が設置されている部屋だつた。

「こ、ここは…」

「私のB e s t p l a c e ね、まあとはいえ今日は凜のB e s t p l a c e になるかも知れないけどね！」

そう言つて、寂園は嬉しそうにニコニコと笑みを浮かべていた。

まさか、こんなバーの奥に広い部屋があるなんて予想もつかなかった。そして、立てかけられているギターなどの音楽機器もどこか年季が入つているような色をしている。

そんな中、年季が入つたギターをジッと見ている凜に寂園は近寄ると耳元でこう囁いた。

「o h・、凜はお目が高いね、あのギターはジミーのだよ」

「へ？　ジミーって…？」

「神様、ロツクンロール好きの皆が崇めてるね、あのギター1個だけで

下手すると数億くらいいく代物ヨ」

そう告げた途端、凛の身体が面白い様にぴたりと固まつた。

ギターだけで数億、次元が違う、そして、それだけではない、いたるところにある楽譜やドラム、ギターの数々は全て計り知れない価値があるものばかりだ。

しかも、それが、全部、寂園の所有物であるというから凛はその光景に開いた口が塞がらない。

見る人が見れば気絶してしまう様なそんな凄い部屋だつた。

そして、舞はにこやかに笑みを浮かべるとパン！っと手を叩く、そうちこに来た理由は凛にlessonを施すためだ。

「それじゃ凛、STARTしようか」

「？ 始めるつて何を…」

「dancing lesson！ 私が貴女を凄いstarにしてあげる」

そう言つて寂園は嬉しそうに笑つて設置した音楽機器を弄り始める。

そして、ストレッチ、寂園の関節の軟らかさは異常で凛にもdanceの高いレベルを求めるには寂園の様な関節の軟らかさを身につけてもらう必要がある。

もう限界くらいに関節を伸ばしているのに舞は更にそこから凛は追いかけられていた。

「あだたたたた！ 痛い！ 舞！ これ以上は…！」

「H A H A H A H A ! NO problem、凛、今日からは風呂上がりにちゃんとストレッチをする事ネ、足首も股関節もしつかりする様に」

「わ、わかつ…痛つ！ いたたたた！」

そう促してくる寂園の言葉に頷く凛。

しかし、ストレッチから既に幸先は不安だが、ひとまず一通りの关节を伸ばし切つたところでいよいよ、寂園は本題のdanceのlessonへと入りはじめる。

「まずはmy danceを真似て一緒に踊りながら振り付けを覚え

てみて?」

「お、OK、舞」

「よし! それじゃ行くよ!」

そして、舞はお洒落なハットをいつもの様に深く被るとキレのある動きからピタリと静止する。

凛はそれをできる範囲で寂園の後ろから見ながら真似をしていた。もちろん最初であるからやはり動きもぎこちない、しかし、それは致し方ない事である。

次に寂園は音楽に合わせて踊りながら曲を歌いはじめた。そして、楽しそうに踊りながら凛に歌を振つていく。

「d a n g e r o u s♪ はい!」

「デ、デンジャラス♪」

「NO! STEPが雑だよ! 凛! もつとcoolに! そして滑らかに! そして、enjoyしてやるのが一番だよ」

そう言うと、寂園は後ろで踊りを真似ている凛にこやかに微笑みかけると自分が被つていたハットをお洒落に凛に被せた。

スパンという革靴の音にキレキレダンスが音楽と共に凛の目の前で披露される。

凛はハットを寂園がいつもやっている様に被るのを真似ながら、その動きに必死についていく。

「ポウ!」

声高い寂園の声が部屋に木霊する。

気がつけば凛は笑顔で寂園と共にdanceを繰り広げていた。なんだか、魔法が掛かつたみたいに身体が不思議と動く。

そして、先日、花屋の目の前で披露したムーンウォークを凛の面前で寂園は披露する。

「これはちょっと凛にlectureするのは先かもね?」

「はあ…はあ…す、凄い」

あれだけ踊つているにも関わらず寂園は全く息一つ切らしていくない、それどころか余裕すら感じさせられる。

初めてdance的lessonを受けた凛はついていくのが

やつとだ。でも、踊るのは楽しかった、左右に身体を振るたびに鏡に映る自分の身体が別のものの様にさえ感じる。

そして、一通り、danceと音楽が終わると寂園はにこやかな笑みを浮かべて尻餅をついて息を整える凜の側に近寄ってきた。

「どうだった？」

「…す、すぐキツかつた…。でもなんだか…」

「楽しかった、でしょ？」

そう訪ねる寂園の言葉に凜は静かに頷く。

確かに最初の練習でついていくのに必死で体力的にもキツかつたが、何より踊つて歌を歌つてみて凜は楽しかった。

凜はにこやかな笑みを浮かべると真っ直ぐに寂園の目を見つめてこう告げる。

「ありがとう、舞。なんだか…今日で色々と吹つ切れた気がする」

「そう…。もう凜の中で answerは出たみたいね？」

凜は寂園のその言葉に静かに頷く。

色々と迷っていた部分があつた。果たしてアイドルがどんなものか知らないしわからない、けれど、少なくとも自分の目の前にいるこの人を目標にするにはこれが1番良い手段だと凜は思っていた。目の前にいる踊りと歌の次元が違う人物に追いつきたい、隣で踊りを踊つてみたい、歌を歌つてみたい。

だつたらやる事は一つだけだった。

「うん、私…、舞みたいなエンターテイナーに成りたい。だから、アイドルになる」

「いい顔ね！ very cute だよ凜！ そうだね、私がdanceの先生してあげるからすぐに上手くなるよ」

「うん！」

凜は力強く頷くと差し出された寂園の手を力一杯握りしめて立ち上がる。

そして、寂園は凜の肩をポンポンと叩いた。彼女ならきっとアイドルとして大きな成功を収めることができるだろう。

できることなら自分はそんな彼女の手助けが出来れば良い、寂園は

そう思つていた。

寂園はパツと腕時計の時間に目を通す。もう良いくらいの時間だらう。

「今日のlessonはここまでネ、凛、この後ちょっと時間貰える？」

「へ…？ あ、うん大丈夫だけど」

「OK！ 今日、ここで私のLiveを行うからさ、良ければ見てつてよ」

そう言うと、寂園は笑みを浮かべて親指で先ほどのバーを指差していた。

寂園はこのお店で定期的に外国人ややつてくるお客様に向けてライブを行つてゐる。そして、やつてくるお客様は数知れず、彼女を一目見ようといつもこのバーはパンパンに膨れ上がり、彼女のdanceや歌をなかなか見ることが出来ない。

しかし、寂園はそこの店主であるトムとは仲が良く、莫大な収入をもたらしてくれる寂園にトムも信頼を置いてゐる。

そして、今回、凛には最前列の席をそのトムにお願いして用意してもらつっていた。

「見たい…、絶対見たい！」

「ふふ、凛ならそう言つてくれるって思つてたヨ、それじゃまた後でね！ トム！ 凛をお願いネ！」

「OK！ さ、嬢ちゃんこっちのSpecial席に案内するヨ」

まるで、VIPの様な扱いを受けながら凛はトムから案内され、寂園が用意してくれた席に着席する。

辺りを見渡せば物凄い数の外国人の人達が來ていた。まさか、日本にこれだけの外国人を見る事になるとは凛も度肝を抜かされた。

彼らの目的はただ一つ、全員、寂園のライブを見に来ているのだ。しばらくして、ライトが消灯し、用意されたステージにスポットライトが当たる。そこにはいつもの様にハットを被つた寂園の姿があつた。

「thank you everyone :), s go...」

そして、寂園の掛け声と共に音楽が始まり、凄まじい歓声が巻き起
こつた。

そこからは寂園の独壇場である、ターンをして、ポーズを決めると
聞き惚れる様な滑らかな英語の歌声が店内に広がつていった。

寂園が繰り広げるキレキレのダンスに周りからは驚きの声が上が
る。

「h o w f u n k y s t r o n g♪」

そして、声高に歌う歌声は同じ女性だというのに目が釘付けになつ
てしまふほど、思わずときめいてしまう。

男性だけではなく女性の外国人は悲鳴をあげながら寂園に手を
振つて一目彼女を見てもらおうと必死だ。

その女性に気がついた寂園はにこやかに微笑みウインクを飛ばし、
また、キレキレのダンスを披露しながら凛の方へ身体を向けると近
寄つていき、軽い投げキッスをした。

凛はその姿を見て思わず顔を真っ赤にする。

ただただ、凄いの一言だった、ダンスを真似してみようとする者、は
たまた、曲を口ずさむもの、身体を上下させている者。

凛が辺りを見渡せば色んな人達がいた。ただ彼らに共通している
のは一つだけ、視線の先で踊っている寂園に釘付けということだけ
だ。

「♪♪♪」

そして、寂園は歌を歌い終えるといつもの様にキレの良いポーズで
曲を締める。

その瞬間、全員が大声をあげての拍手喝采の嵐だつた。それを目の
当たりにした凛は目をキラキラとさせて彼女を見つめた。

やつぱり、寂園は凄いと、これだけの人達を全員感動させられるだ
けの卓越した技術や歌声を披露させられれば、凛も彼女を誇らしく感
じてしまう。

「t h a n k y o u v e r y m u c h！」

彼女はその場でお辞儀をすると被つていたハットを深く被り、ス
テージから立ち去つていく。

そして、彼女が立ち去ったバーの客からは止むことの無い拍手喝采が惜しむなくずつと鳴り響いていたのだつた。

それからしばらくして、トムに連れられ凜はバーの裏口へと案内される。

そこには、笑顔で手を振る寂園の姿があつた。

「どうだつた？　p r i n c e s s、私のL i v e」

「…すゞかつたよ！　私、思わずときめいちゃつたし」

「o h、t h a n k　y o u！　でも、私は凜もきっとあれくらいできるようになると思うよ」

寂園は嬉しそうに感想を述べる凜の肩をポンポンと叩くと笑顔でそう告げる。

そして、寂園はしばらくして腕時計で時間を確認すると凜に笑顔でこう告げる。

「さつ、今夜は遅いから私が自宅までe s c o r tするね」

「本当に？　でも…」

「いいから、私がそうしたいのヨ、私は凜のことがl i k eだからね！」

寂園は笑顔でウインクし、サムズアップして凜に応える。

それに女性だけでは夜道は危ない、寂園は凜の側で今日、彼女をエスコートしてくれたバーの店主であるトムにこうお願ひする。

「トム、車回して貰うようにジェイクにお願いしといて」

「OK！　今日も最高だつたヨ！　マイケル！」

「t h a n k　y o u、売り上げも上々でしょ？」

「Y E S、お陰様でね」

トムは寂園に応えるようにサムズアップしてにこやかな笑顔を浮かべていた。

寂園がこのバーでいつもL i v eをしてくれるお陰でこの店は物凄く繁盛している。そのお陰でわざわざ米国から著名人が彼女の元を訪れたりしてくれるのでそれを見に来ようと新規のお客さんが米国からわざわざ遥々この日本まで追っ掛けてくるとか。

そんな話しが寂園から聞かされた凜はd a n c eのl e s s o n

をした部屋のことを思い出す。

確かにあれだけのギターやら値打ちがありそうな楽器があの部屋に置かれていたのに妙に納得がいつてしまつた。

「それじゃ、帰りましょ、リン！」

それから2人はトムが呼んでくれたジエイクに車を運転してもらひ、トムが開いているバーを後にした。

なんだか、知らない世界に触れた今日、凛は隣で座っている寂園のお陰でまた一つ大人になつたなど実感することができた不思議な日になつたのだった。

lesson 3

あのバーでのlessonから翌日。

アイドルになると決心した凛、そんな、凛の元に先日、彼女が話していたスカウトが再び姿を現した。

そして、今度は偶然にも凛の隣に寂園がいる。

今日は夕方から息抜きにと学校を終えた凛を誘つて夕食に赴こうと寂園は考えていたのだが、どうやらその予定は少し変更しなければならないみたいである。

凛はなんだか、寂園との予定が邪魔されたのが嫌だつたのかムツとした表情を浮かべてスカウトの顔を真っ直ぐに見据えていた。

しかし、寂園はとくにそれを興味深そうにこやかに笑みを浮かべながら目の前に現れた仏頂面で厳つい顔をしたスーツ姿のスカウトの男性を眺めている。

「凛さん、これから話しだけでも…」

「またですか、今から彼女と予定があるのでみませんが…」

そう言つて、隣にいる寂園の腕を掴みそそくさとその場から立ち去ろうとする凛。

これで3回目のスカウトだ。確かに寂園には自分はアイドルになりたいとは言つたが、彼のように毎回スカウトに来られると正直、困るとしていた。

それにこれから、寂園と食事をするという予定もある。だからこそ、今回はこのスカウトを突っぱねてやろうと凛は思つていたのだ。

しかし、一方の寂園はそんな凛の意思に反して、にこやかな笑顔を浮かべて静止するように促しはじめた。

「ヘイヘイ、stop凛！　oh、貴方が凛が話していたscoutかな？」

「あ…はい…、ところで貴女は…」

「私？　oh sorry、私はこういう者ダヨ」

そう言つて、寂園はスカウトに名刺を手渡した。

その名刺を見たスカウトは目を丸くしながらそこに書かれている文字にゅつくりと目を通し、さらにお返しにと自分の名刺を手渡す。それを目の当たりにしていた凛はなんだか不機嫌そうにその光景を黙つて眺めていた。

「エンターテイナー…ですか…。舞・K・寂園さん？」

「堅苦しいから舞でOKだよ、マイケルでもno problem だけどネ、武内さん」

そう告げる寂園はニコリと笑顔を浮かべて、名刺を交換した武内という名のスカウトと握手を交わす。

そんな2人のやり取りを見ていた凛は2人の間に割つて入ると寂園に告げる。

「ちょっと、舞…！」

「凛、この人は niceなスカウトさんですね！ 今時珍しいスカウトだヨ！」

「へ？ な、どういう事？」

そう言つて、サムズアップして来る寂園の言葉に驚いたように声を上げる凛。

しかし、寂園は何食わぬ顔で腕時計で時間を確認すると、目の前にいる凛をスカウトしに来た武内という人物にこんな提案をしはじめた。

「へイ、Mr. 武内、この後TIMEは大丈夫？」

「え？ あ、まあ、はい。時間には余裕はありますが…」

「OK！ それじゃ今からyouも来ると良いよ！ それじゃ凛、レストランにlet's go！」

「ちょ！ 待つてよ！ 舞！」

「ま、舞さん？」

そう言つて、寂園はいつものようなテンションで楽しそうに凛とスカウトの男性、武内の腕を掴み行く予定だつたレストランに向かい歩きはじめる。

それに付き合わされる武内は困ったような表情を浮かべていたが、もはや、こうなると寂園の独壇場であつた。

それから、繁華街をしばらく歩く事、数分。

3人はアメリカンな感じのお洒落なレストランへとやつてくる。そのレストランを見た凛と武内は明らかに戸惑った様に寂園を見つめていた。

しかし、寂園は相変わらずの様子で店内にいる店員に声を掛けると握手を交わして英語で話しかけている。

それから、寂園は親指で背後を指差しながら笑みを浮かべ、待機している2人にこう話しかけ始めた。

「OK！ とりあえず3人分の seat。 getできるみたいだから私について来て、 come on！」

「う、うん」

「なんだか、凄い店ですね…」

「H A H A H A ! d o n , t w o r r y ! すぐに慣れるヨ！」

2人はそのまま、寂園に連れられて店内をしばらく歩くと外の景色が見える窓側の席に案内される。

そして、武内と寂園、凛は対面する形で椅子に着席した。周りを見渡せば外国人の人非常に多い、日本であるのに席に座っている2人はどこかアウエイな雰囲気があった。

しかし、周りを見渡していた凛はステージがある事に気づくと、寂園にこう質問を投げかける。

「ねえ、舞、ここってさ…」

「そ、ここも私がLiveするのに使つてる場所」

「やつぱり…」

「ふふん、良い place でしょ？ まあ、トムのバーでやる事が割と多いけどね？」

肩を竦めて笑みを浮かべ凛に告げる寂園。

ここでも寂園はたまに歌やダンスを披露し、客の集客を行なつている。もちろん、寂園がLiveをするとなればここは物凄い人だからができます。

そんなたくさん訪れた人が店に落として行くお金の一部から寂園

は収入を得ているのである。

以前、バーに置いてあつた寂園の所有物であるギターやあれらの楽器は元から持つていた完全な頂き物だ。今の寂園に数億もする楽器を購入できるほどの資産は持ち合わせていない。

そして、落ち着かない様に辺りを見渡している武内に寂園は本題について話しをしはじめた。

「それで、Mr・武内、凛をスカウトするきつかけだけどネ？ 彼女の何に惹かれたの？」

そう言つて、にこやかな笑顔を浮かべて、武内の目を真っ直ぐに見据える寂園。

凛を三度もスカウトするその理由を純粹に寂園は知りたかった。歌唱力か、それとも綺麗に整つた容姿か、はたまた、別の何かか。すると、先ほどまで周りを見渡していた武内はその寂園の言葉にピタリと固まると真っ直ぐこちらを見てくる彼女の眼差しに視線を向ける。

それから、しばらくして、彼は言いにくそうに首の辺りを摩りながら、ゆっくりと寂園にこう告げはじめた。

「笑顔です。私は彼女の笑顔に惹かれました。 ……そして、今、私の目の前にいる貴女の笑顔にも、正直に言つて惹かれてしましました。貴女さえ良ければ凛さんと共にアイドルになりませんか？」

先程まで、困った様な表情を浮かべて、目の前にいる寂園から視線を逸らしていた武内はいつの間にか、表情を変えると寂園の目を真っ直ぐに見据えてそう告げてきた。

すると、武内から発せられたその言葉を聞いた寂園はクスクスと笑いはじめた。まさか、三度もスカウトする理由が笑顔だけとは予想もしてなかつたからだ。

しかも、今度は凛だけでなく自分までスカウトしている始末である。まさか、こんな風な口説かれ方をしたのは寂園も初めての事だった。

「H A H A H A！ 笑顔！ S m i l eですか…！」

「ちょ、ちょっと寂園！」

「OK! OK! フウ：ちょっと待つてくださいね」

ひとしきり笑い終えた後、寂園は呼吸を整える様に深呼吸する。

凛だけでなく、まさか、こんな風に彼から自分がスカウトを受けるとは思つてもみなかつた。寂園は困つた様な顔をする武内を真つ直ぐに見据えて笑みを浮かべる。

「OK、そのスカウト受けてもいいわ、確かにアイドルもエンターテイナーも1番はSmileだもんネ」

「?…ほんとですか！」

「YES、いろんなofferを蹴つてきたけれど貴方みたいなofferは正直、初めて。だからこそ気に入つたわ」

そう言つて、嬉しそうに席から立ち上がる武内に寂園は静かに頷く。

笑顔が素敵なアイドルを見つける彼のスカウトが寂園は純粹に気に入つた。だからこそ、彼女は彼のofferを受けることに決めたのである。

しかし、嬉しそうに喜ぶ武内に寂園は『ただし』と念を押す様に話しを続け始める。

「その代わり条件があるけど？ 大丈夫？」

「条件？…はあ、それは何でしよう」

そう言つて、武内は首を傾げて寂園にそう問いかける。

スカウトを受けてもらう事は無事にできた。しかし、そのスカウトを受けるにあたつて条件を提示してくるアイドルなど今まで武内は遭遇した事がない。

とりあえず、スカウトを受けてもらえるならと武内は寂園の言葉に頷いた。

「まず最初に、私が歌う曲は作詞、作曲、振り付けは全部私、そして、ソロであること。それに凛がソロで歌う場合も私が作曲した曲とか条件はその他、諸々あるけど？」

「え…、それは…」

「あとこの娘の育成plan拝見させてもらつても大丈夫？」

そう言つて、提示された条件に驚いている武内に淡淡と要望を告げ

る寂園。

しかし、何故か武内は彼女の言葉に気圧されている、何というか、今まで対面した事がない類の女性だつた。

武内は言われるがまま、とりあえず、予定している凜の育成 plan を書いた書類を寂園に見せる。

それをひとしきり見た寂園は溜息を吐くと武内にその書類をそのまま武内にお返しした。

「なるほどね、ユニット組ませるつもりだつたの」

「はい…あと2人とユニットを組んでもらつてデビューしてもらう…といった具合でした」

「ふーん、まあ、ユニットを組むのは no problemネ。まあ、あとで私が書いた詳しい条件の紙を渡すからそれに目を通しといて…えーと、なんだか話が…」

トントン拍子に進んでると言うつもりだつた凜は思わずその言葉を飲み込んでしまつた。

よくわからないが、知らない内に凜はスカウトを受ける方向で既に話が進んでいる様である。

いろいろと言いたい事があるが、この2人の話に割つて入る様な技量は凜は持ち合わせていない。

そして、寂園は武内に最後に凜と自分をスカウトしたという点に置いて必ず言つておかなくてはいけないことを彼に語り始める。

「さて、Mr. 武内、一言言つておくわね？ 私はこの娘がアイドルになるのなら…」

そう言うと、寂園はにこやかな笑みを浮かべて凜の背中に手を回す。

それは、寂園が凜と出会つたあの日、メディアに再び立つという選択を自分が取る時に決めていた事だ。

その言葉に武内は思わず息を飲む、これ以上、彼女は自分に何をさせるつもりなのだろうかと。

「私はこの娘に全米チャート1位を getさせるつもりなんだけど…。貴方、ついてこれる？」

「はい？」

「え？」

その瞬間、2人の空気が凍りついた。

今、彼女はなんと言つただろうか？と凛と武内は顔を見合わせる。確かに2人は寂園の口から全米音楽チャート1位という言葉を聞いた。

日本でも音楽チャートの1位を取るのは至難の技で、それこそ、今はアイドル事務所があちらこちらに建てられている。

それにも関わらず、その、日本での音楽チャートをすつとばして、全米チャートの1位を取ると何事もない様に告げる寂園の言葉は絵空事を言つている様にしか聞こえなかつた。

「…それ…本気で仰つてます？」

「YES！なんなら私がmodelを見せようか？youの事務所に所属して渡米して、そのままgetしてきてあげるヨ！」

「…どうやら、本気みたいだね」

そう言つて、顔を引きつらせている武内に凛は肯定する様に静かに頷く。

なんの躊躇もなく全米チャート1位を取れると豪語する少女に武内は目を丸くするばかりである。

そして、同時に自分はとんでもない娘に声をかけてしまったのではないのかと、彼はそう思うほかながつた。

アイドルになる事になつた凜と寂園。

2人は翌日から事務所に来る様にスカウトの武内に言われ、ひとまず、大まかな話は纏まつた。

そして、アメリカンレストランに食事を終えた凜と寂園の2人はこの後、用事がある武内と別れた。
別れた武内の背中を見送つた後、寂園は凜に笑いかけながら提案をし始める。

「リン！ ちよつとあそこの公園で話さない？ 貴女もいろいろ言いたい事あるでしょ？」

寂園は親指で夜の公園を指差しながら、明るく凜にそう告げた。
凜も寂園の言葉に頷く、トントン拍子に話は進んでしまつたが、それを含めて寂園に凜は言いたい事が山ほどあつた。

公園のベンチに腰掛ける2人、そして、話しを切り出したのは勿論、凜からだ。

「ねえ…、あのレストランでの話、本気なの？」

「ん？」

「全米チャート1位を私に取らせるつて…私、そんな自信なんてないよ？」

そう、全米チャート1位を自分に取らせるつて…私、そんな自信なんてないに凜は信じられずにいた。

寂園の自信はその神がかり的な歌唱力にダンステクニックを見ていれば可能だと凜は思つてゐる。

だが、彼女に比べて自分にはその自信が無い、あんな言葉が通じるかわからない外国人相手を大勢前にして、果たして歌えるかどうか、それが受け入れられるかどうかすらわからない。

しかし、寂園は笑顔で凜にこう語る。

「no problem! 凜には素敵な笑顔も夢もある。だから心配しなくても大丈夫だヨ」

「つていうか…、勝手に舞が話しを進めるからアイドルにならなきやならなくなつたじやん」

ちよつと不機嫌そうな表情を浮かべて、相変わらず明るい寂園の言葉に口を尖らせて告げる凜。

そこには、アイドルになるのは別に構わないのだが、自分が断り続けたスカウトに二つ返事でOKをした寂園になんとなく納得がいかなかつたという凜の気持ちがあつたからだ。

しかし、一方の寂園は首を傾げてそんな凜にこう話しをしはじめる。

「ん？　だつて凜、アイドルになりたいって言つてたでシヨー？」

「それは…そうだけど…」

そう言つて、凜はブイッと顔を寂園から背けて納得できないような表情を浮かべている。

それを見ていた寂園は仕方ないといった具合に肩を竦める。

勝手に話しを進めてなんやかんやで話の流れでいつの間にか自分をアイドルにしたのがお気に召さなかつたらしい。

すると、暫くして、寂園は何を思つたのか凜の隣で静かにある曲を歌い始めた。

「♪♪♪♪」

それは、凜にも聞き覚えがある曲で、優しさと同時に胸に来る様な英語のフレーズだった。

そして、この曲は寂園にも思い出深い曲だ。

この曲を越え、自分は、いや、自分達は大きくなつた。

凜にはたくさんの可能性がある事を彼女はわかっている。

凜はシンデレラだ、なら、シンデレラには魔法使いが必要、だから、寂園はそんな魔法使いに自分がなれたら良いと考えていた。

夢見るシンデレラの魔法使い、それが、自分なんだ。

その曲を傍で聞いていた凜は寂園の歌声に気がつけば曲に夢中になつっていた。綺麗な歌声と月明かりに照らされる2人。

そして、凜の頬からは涙が流れ出していた。

寂園の綺麗な歌声に胸を打たれたのか、その曲に何かを感じ取った

のかそれはわからない。

そんな凛の様子を隣で見ていた寂園は優しく彼女の頭を撫でながら静かに曲を終える。

「Let's it be...、凛はその通り生きれば良い。私の願いはありのままの凛をすごい場所に連れていくてあげる事だから」

「…舞…、この曲…」

「私が尊敬する人の曲だよ、もしかしたら聞いたことあるかも知れないね？」

曲を終えた寂園は静かに目を瞑ると凛にそう告げた。

この曲は彼女の胸の中に生き続けている、だから、これは、凛に聞かせてあげたかったと寂園は語った。

そして、寂園は自分についての話しを凛に語り始める。

「…私はね、実は孤児院育ちなんだ」

「? …孤児院…、お母さんやお父さんは…」

そう言つて、凛は話しをし始めた寂園の言葉に驚きを隠せないでいた。

あんなに明るく振舞つて優しい彼女にまさか、そんな生い立ちがあつたなんて予想もしていなかつたからだ。

寂園は凛の言葉に肩を竦めると左右に首を振り、につこりと笑顔を浮かべていた。

「居ないよ、小さい時に父親から虐待を受けたてね。それから、保護施設に保護されて、孤児院で私は育つたの…そんな時に私の生きる力になつたのがmusic」

「music…音楽？」

「YES！ まあ、虐待を受けたのは…慣れてたつていうか、それでもやっぱり辛かつた。だからダンスや歌にescapeしてたのよね、それしかなかつたからさ」

寂園は優げに笑みを浮かべ、凛に淡々とそう語つた。だが、その聞かされた内容は凛が思つていたよりも衝撃的で言葉を失つてしまう。それでも、今の彼女は笑顔を浮かべて明るくみんなの前で歌や踊りを披露している。

正直、凜は自分とは違う、酷い家庭環境の中でこれだけ強く生きてきた人間を知らない。

すると、寂園は腰掛けっていたベンチから立ち上がりと笑みを浮かべて凜に手を差し伸べる。

「辛氣臭い話はこれで end! さ、帰ろう! 明日からアイドルなんでシヨ? Smile! Smile!」

「舞:」

「まあ、私が身の上話なんかしちゃつたからなんだけどネ! 明日からstarの第一歩だから張り切らなきや、それじや夜遅いし家まで送つていくヨ!」

そう言つて、寂園はベンチに腰掛ける凜に笑顔を浮かべたまま、手を差し伸べる。

その手を掴んだ凜は先ほどまで頬を伝つていた涙を拭い、彼女の手を掴む。

もう、走り出した足は止めるることは出来ない、自分の夢、寂園の隣で共に歌を歌い、踊り、輝くステージの上でみんなに夢を届けるという目標。

それが、明日からの渋谷凜の目標だ。

スカウトを受けた翌日。

凜は寂園と共に武内Pが働く346プロダクションまでやつてきた。今日から2人はアイドルとしてこここの事務所の所属という事になる。

早速、2人は受付に話を通してもらい、武内が働いているオフィスに足を運んだ。

「お二人ともお待ちしてました」

「Hello! Mr. 武内!」

「こんにちは」

オフィスの扉を開けて、机で書類を整理しながら目を通す作業をしていた武内に挨拶を交わす2人。

そして、ツカツカと武内の側まで歩いていく寂園はにこやかな笑顔

を浮かべたまま、彼にこう告げる。

「ヘイ、Mr. 武内！ 私の条件書見てくれた？」

「はい、目を通しました。：：とりあえず、この条件なんですが…」

「ん？ どうしたの？」

そう言つて、困った様な表情を浮かべて寂園から言い辛そうに視線を逸らす武内、それを見ていた彼女は首を傾げる。

暫くして、武内はため息を一つ吐くと目の前にいる寂園にこう話を切り出し始める。

「実は…受け入れる代わりに、貴女の能力を見たいと上方からお達しがあります…」

「Oh! OK! OK! オーディションだね！ どこでやる？」

そう言つて、二言返事でサムズアップして応える寂園。

寂園としても早い話がこここの偉い人達にダンスや歌を見せた方が手つ取り早いと最初から思つていた事なので、むしろ、武内の言葉は願つたり叶つたりである。

上手くいけば、自分の要望が通るだろうし、この言いづらそうにしていた武内の提案は寂園にしてみれば実にありがたい話であった。

その武内と寂園の話しを聞いていた凜は慌てた様に2人に声をかける。

「今から私と一緒について来てください、部屋にご案内します」

「ちよ…、待つて、私は？」

「凜さんはすいませんが少しこれでお待ちしていただいてもよろしいでしようか？ そこのソファにお掛けになつていてください」

「…わかった」

「don't worry ! 凜、すぐ終わらせてくるからちよつと待つててね」

武内の後に出していく寂園は笑顔を浮かべて凜に手を振りながらそう告げる。

それから、凜がオフィス内にあるソファに座るのを確認した2人はオフィスを後にして扉から出していく。

それから暫く歩くと、武内が言つていたオーディションを受ける部

屋の前まで寂園は連れてこられた。

「……です。中には既に審査員の方がいらっしゃります」

「O.K、んじゃ、ちゃつちやと済ませてくるわね、あ、私の音楽機器は持ち込んでも大丈夫？ 一応、持つてきただけど」

「え、ええ、大丈夫です、それじゃ頑張つてきてください」

「YES！ それじゃ行つてくるわね！」

そう言つて、オーディションを受ける部屋へと入つていく寂園。その背中を見送りながら、武内は不安げな表情を浮かべていた。

今回のオーディションは厳しい審査員ばかりだ。いくら、寂園が自信があるとはいえ、彼らに完膚なきまでに言われたりすればその自信が失われてしまうかもしれない。

そうなれば、この先の彼女のアイドルとしての可能性を失つてしまふかもしれない、この時は武内はそう思つていた。

それから約1時間程度を予定している346プロダクションのオーディションを寂園は受けた。

見られるのはダンスや歌唱力、そして、彼女が作曲した歌詞や歌などそれぞれのジャンルで審査が行われる。

そう、オーディションは大体、約一時間程度、その予定であつた。武内は静かにオーディションが行われている部屋の前で時計を確認する。既に一時間はとうに過ぎていた。

それどころか、30分過ぎても寂園が部屋から出てくる気配はない。

それから暫くして、オーディションが行われていた部屋が開かれれる。ようやく、オーディションが終了したのかと武内が寂園を迎えるとしたその時だった。

中から出てきたのは寂園ではなく、今回のオーディションの審査員の男性だつた。彼は顔を真っ青にして武内の側に近寄るところ声をかける。

「武内くん！ ちょっと！」

「はい？ 三上さん、オーディションの方は…」

「いいからちよつと来たまえ！」

そう言つて、武内の肩を掴んだ審査員の三上と呼ばれる男性は慌てた様に彼を呼び出すと部屋から少し離れた場所まで連れていく。

そして、相変わらず、彼の表情は真っ青になつていた。その目には、先ほどまでどんでもないものを見たような、そんな表情を浮かべている。

武内を呼び出した審査員の男性は彼の肩をがつしりと掴むと震える声でこう話しかけはじめた。

「あんなどんでもない怪物…。君、どこから連れて来たんだね！」

「…はい？」

「寂園君の事だ！　あれは…日高舞の再来だぞ！　下手をすればそれ以上だよ！　あんな技術を持ち合わせていながら、何故、今の今まで世に出てこなかつたのか不思議なくらいだ！」

震える声で出てきた審査員は武内の肩をがつしりと掴んで告げた。
日高舞。

その名を聞けば、このアイドルの業界の者なら知らない者は居ない怪物であり、数多くの伝説を打ち立てたアイドル。

そんなアイドルに匹敵すると厳しい審査員から言わせた寂園、そんな彼女の評価を聞いた武内は目を見開いた。

「…か、彼女がですか？」

「ああ、そうだ、作詞作曲はもちろんだが、ダンス、歌唱力。もう非の打ち所がない、私達が語るのが申し訳なくなるレベルだ」

「審査が厳しい貴方がそこまで言うなんて…」

「とりあえず、この件は美城常務に報告させて頂く…。下手をすれば彼女は何百億と稼ぎ出す逸材だ、我々の目に狂いがなければな…、でかしたぞ武内くん！」

その三上の言葉に武内は言葉を失つてしまつた。

まさか、笑顔が素敵だとスカウトした筈の寂園がそんな技術を持ち合わせているなんて思いもよらなかつた。

一方、オーディションを終えた寂園はとくに部屋から出てくると呑気に背伸びをして腰骨を伸ばしている。

そして、武内の姿を見つけると、いつものようににこやかな笑顔で

審査員の三上との話しを終えた彼の元にやつってきた。

「んー、後三時間くらいぶつ通しで踊つても問題なかつたんだけど駄目だつたヨ」

「…3時間…、と、とりあえずお疲れ様でした寂園さん…」

「t h a n k y o u ネ、M r. 武内」

そう言つて、労いの言葉を送る武内にいつものように笑顔を浮かべてサムズアップで応える寂園。

それから、暫くして、思い出したように寂園はあつ、という言葉を漏らすと武内にこう話しをしはじめた。

「それで？ 私の条件は飲んで貰えるのかな？」

「多分…、あの調子ならある程度は全面的に貴女の条件を会社側が飲んでくれると思いますよ…」

審査員があれほど言つた人材ならば、346の事務所ではなく、寂園が他所の事務所に取られてしまう事を恐れる筈だ。

346プロダクションの相当な稼ぎ頭になり得る存在、それが、この武内の目の前にいる少女である。

ならば、彼女の機嫌を損ねて他所の事務所に移籍させるような真似は到底できるわけが無い。

「O K ! それなら n o p r o b l e m ね ! 凜をだいぶ待たせちやつてるから迎えに行きましょ !」

「は、はい、行きましょうか」

武内はそう言つて、オーディションを終えた寂園に言われるがまま、共に凛が待つオフィスに向かい歩きはじめる。

しかし、これは彼女が346プロダクションでの伝説を残すその序章に過ぎなかつた。

キングオブポップと呼ばれた伝説の躍進が始まる。

オーディションを終えた寂園を連れて、再び、自分のオフィスへと戻つていく武内。

厳しい審査員の三上という男性を含む全員から怪物と称される少女を傍らに連れている彼の心境としてはこんな少女がまさか、そんな能力があるとは未だに信じられずにいた。

しかし、そんな寂園はとくに英語で音楽を口ずさみながら指をパチンパチンと鳴らしている。

「うーん、もうちよい impact があるフレーズが良いかな？ んー」

難しい表情を浮かべながら口ずさむ曲に納得がいってないのか何やら悩んでいる様子であつた。

そんな呑気な彼女の姿を見ていると武内は思わず笑みが溢れてしまいそうになる。とはいえ強面の武内は笑うのが苦手なので相変わらずの仏頂面であるのだが。

暫くして、オフィスの扉の前まで戻つてきた2人は中へと入る。

「……ちょっとつてなんだつたかな？ 舞？」

そう言つて、ソファに腰掛けている凜が満面の笑みで2人を出迎えてくれた。

しかし、その表情とは裏腹に明らかに怒つているような口調である。まさか、ここにきて一時間近く1人でこんな知らない部屋に待たされれば凜も不安になるのも致し方ないし、怒る理由も領ける。

そして、ソファから立ち上がりズンズンと歩み始めるとその笑顔のまま寂園の顔前まで迫つてくる。

その迫力に寂園も思わず苦笑いを浮かべて顔を引きつらせていた。

「…oh…、り、凜、s or ry」

「2時間くらい掛かつたよね！ ね！」

「いやー、私のdanceとmusicを審査員の人達がもつと聞きたいっていうもんだからサ！ ちょっと張り切り過ぎちゃった」

そう言つて、迫つてくる凛から視線を逸らして、冷や汗を垂らして助けを求める様に隣にいる武内に視線を向ける寂園。

しかし、その助けを求める寂園の視線から武内はスッと視線を逸らす。それを見た寂園は軽くショックを受けた。ここに来て、まさかの武内の裏切りである。

こうなつては自分でどうにかするしかないと寂園はパン！と手を叩くと凛にこう話しきをはじめる。

「へイ！OK！ わかつた！ sorry！ 今度、美味しい料理食べさせてあげるから、許して」

「…ふーん…」

「あ、疑つてるね？ 食べたら多分、凛が腰抜かすヨ？」

「…ま、まあ…それなら許してあげる」

「H A H A H A！ 凛は本当に素直で可愛い p r i n c e s s ネ！」

「もう！ そうやつていつもはぐらかすんだから！」

そう言つて、機嫌が良くなつた凛の頭を撫でる寂園。ひとまず、オフィスで凛を二時間も放つたらかしにして待たせた件についてはこれで丸く收まるみたいである。

落ち着いた頃合いを見計らつて、武内は戯れる2人に改めて口を開く。今回、凛を呼んだ目的も含めた大事な話だ。

「遅くなつてしません、凛さん、これから養成所に向かいます」

「… 養成所？」

「o h、l e s s o n s c h o o l ネ！」

そう言つて、声を上げる2人の言葉に領く武内。

そして、そのことに関して改めて伝えておかなくてはいけない事について、凛と寂園に話をしあじめる。

「実は、既に先にお一人程、候補生の方が養成所にいらつしゃいます。多分、今はトレーニングを行つて いる最中ですね」

「ふーん… そ う な ん だ」

「t r a i n i n g ネ、n-1、d a n c e l e s s o n？」

「はい、今日は丁度そのレッスンかと」

「r e a l l y？ o h、そ れ は 面 白 そ う ネ！」

そう言つて、にこやかな笑顔を浮かべている寂園。

どんなダンスレッスンをしているか、彼女は非常に興味があつた。条件にも書いてはいるが、凛のレッスンは寂園がマンツーマンで教えようと考えていたからだ。

レベルが高いダンスレッスンならもしかしたら彼女の能力を上げるにも役立つかもしれない、そう考えていた寂園は早速、養成所のトレーニングがどんなものか見てみたい気持ちがあつた。

それに凛とユニットを組ませようとしている2人にも寂園は非常に興味がある。

武内がスカウトした女の子、もしかしたら凛の様に面白い子がいるかもしれないという期待感があつた。

「それじゃ！ 養成所に I e t , s g o ネ！ ヘイ！ 凛、M r . 武内！ 早く行くよ！」

「ちよ！ 舞！ もう！ こんな時は行動早いんだから！」

「あ、待つてください！」

そう言つて、先導して駆けていく寂園に声をかける2人は後を追う様にオフィスから出ていく。

何はどうあれ、こうして、凛と寂園の2人の活動はこれから始まるうとしていた。

それから暫くして、武内の案内で養成所に訪れる事になった2人。既に中には武内が話していた通り人がいて丁度、ダンスのレッスンをしている最中のようだつた。

寂園と凛の2人は先導する武内の後ろからついていき、ダンスのレッスンをしている中、部屋へと入る。

「……」

武内は部屋へと2人を招き入れると中ではダンスのトレーナーと共に踊る女の子たちの姿が目に入つてきた。

ターンや、腕の動き、そして、音楽に合わせてステップを踏む女の子達とダンスの指導者。

すると、それを面白そうに寂園は眺めている。ダンスのステップや

腕の動き、そして、彼女達全員の表情をじつと分析するような眼差しだった。

「はい！　ここで切り返し！」

そのダンスのトレーナーの掛け声と共に2人はパッと動きを切り返す。

すると、それを眺めていた凛は思わずその練習風景に感心するようにならにいる寂園に声をかけた。

「凄いね…、なんだか」

「ん…？」

「いや、あの迫力。あんな練習するんだ」

そう言つて、寂園に練習風景の感想を述べる凛。

しかし、一方の寂園はとすると肩を竦めて左右に首を振つていた。それは、彼女からしてみればどこか納得がいかない部分があつだからだろう。

暫くして、練習でダンスレッスンを終えた女の子2人は練習風景を見ていた武内と寂園達の姿を見つけると歩いて近寄つてくる。

「お疲れ様ですっ！　プロデューサー！」

「お！　貴女達がプロデューサーが言つてた子達だね！」

そう言つて、元気な声を出して先ほどまで練習をしていたにも関わらず満面の笑みで近寄つてくる女の子2人。

卯月と未央の2人を指導していたダンストレーナーはタオルで汗を拭きながら、武内と視線を合わせると笑顔で頷く。

そして、そんな2人から声をかけられた寂園と凛はそれを肯定するように頷くと話をし始めた。

「Hello! oh! 可愛い Smile の子達だネ！　さすが M

r・武内がスカウトするだけの事はあるわ！　私の名前は舞・K・寂園！　舞で良いわ。マイケルでも良いけどネ！　そしてこつちは

「初めてまして、渋谷凜。よろしくね」

そう言つて、自己紹介を兼ねて名前をそれぞれ語る2人。

それを聞いていた、女の子2人は互いに頷き合うと自己紹介をはじめめる。まず、最初に名前を語り始めたのは、ロングヘアの上方の髪

を両側面から後頭部にかけてまとめ、後ろで1つに結んだ髪型をした可愛らしい少女からだつた。

「私！ 島村卯月と言います！ まだアイドルとして卵ですが、これから今以上に頑張つて、みんなから好かれるアイドルを目指しますので！ どうぞよろしくお願ひしますね！」

「へイ、卯月ネ！ 覚えたわ！ そのbestを尽くす姿勢、私、大好きよ！」

「ほ、本当ですか！」

「YES、努力は報われるものだからネ！ よろしくね！ ウヅキ！」

「私もよろしくね」

そう言つて、卯月と何気なく握手を交わす寂園、そして、凛もまた寂園と同じように卯月と握手を交わして親交を深める。

そして、続いて、自己紹介をし始めたのは短髪の羽毛で活発そうな女の子だ。ダンスを見た感じ身体能力が高いように寂園が個人的に感じた少女である。

「私は本田未央！ 最近知り合つたしまむーとはもう仲良だし、貴女達ともこれから是非仲良くしたいと思ってるんだ！ よろしくね！」

「未央だね、うん、これからよろしく、仲良くしよう

「O.K、n i c eなs m i l eネ！ これからよろしく！」

そうして、活発そうな女の子、未央との自己紹介を終えて握手を交わす寂園と凜の2人。

こうして、一通りの自己紹介を終えた寂園は上機嫌で武内の側に近寄ると嬉しそうにこう話をし始めた。

それは、先ほどから寂園が聞いていた会話の中で気づいた事、武内が彼女達のプロデューサーであり、そして、自分達のプロデューサーである事に気付いたからだ。

「なるほどネ！ M r. 武内、貴方がプロデューサーなんだネ。それじゃ私達もこれから武内Pと呼ばないといけないね、凜」

「あ、そうだつたんだ…。スカウトだけとばかり…。それじゃ武内Pもこれからよろしくね」

「はい、よろしくお願ひします」

そう言つて、武内Pとも改めて握手を交わす2人。

スカウトだけの人かと思つていたがどうやらその武内がプロデューサーを兼任している事について寂園は満足がいつていた。

彼女がアイドルというメディアに晒される表舞台に再び出ようとしきつかけを作つたのは他でもない武内Pだ。

だから、もし、自身のプロデューサーにするなら武内Pだと会社側に直談判するつもりだつたのだが、手間が省けたと寂園は思う。

それからしばらくして、ひと段落したところで寂園はダンスのレッスンを指導していたダンストレーナーの元ヘツカツカと歩いていく。「ちよつと聞きたいことがあるんですけど良いですか？」

「…はい？」

「yōuがダンスのトレーニングの先生？」

「え、そう…ですけれど」

そう言つて、先ほど未央と卯月にダンスの指導を施していたダンストレーナーに訪ねる寂園。

すると寂園はにこやかな笑顔を浮かべて、肯定するように頷いたダンストレーナーである彼女に親指でダンスレッスンを行つていた部屋を指差してこう話をし始めた。

「さつきのダンス。一から全部凜とlectureして欲しいんだけど時間大丈夫かな？」

「え、ええ、それは…大丈夫ですが」

「ちよつと！ 寂園！」

「ええ！ 今から！」

そう言つて、驚いたような声を上げる未央と静止するように寂園に声を掛ける凜。しかし、寂園はにこやかな笑顔のままで武内Pの目を見る。

そこには一回、ダンスレッスンをさせて見ろという明確な意思が込められた視線が武内Pに向けられていた。

寂園のその眼差しと目が合つた武内Pは困つた様に頭を抑えるとダンスのレッスンをつけてくれたダンストレーナーに視線を合わせて静かに頷く。

それを受けたダンストレーナーは仕方ないと言つた具合に寂園と
凜にこう告げはじめた

「…わかりました、それじゃ教えますね？」

「OK…、凜、着替えて来なヨ、スグに準備して come on !」

「ちよ、ちよっと待つて！」

「なんだかすごい事になつて來たね」

静止する凜を他所に既に準備万端な寂園の姿に圧倒されてしまう
く卯月。

そして、凜は寂園に言われた通り、更衣室に未央から案内されると
ジャージに着替えてレッスンルームへとやつてくる。

それから、ダンストレーナーの言う通りの振り付けを凜と寂園の2
人は共に一通り教えてもらうのだが、一通り教えてもらつた時点では寂
園はダンストレーナーである彼女にこう告げた。

「OK、もう全部覚えたわ、通して全部音楽流してちようだい」

「はい？」

「え？ 嘘、まだ振り付けを復習する段階だよね！」

「…本当に…？ いやいやいや…」

「じあ、一緒にdancingしましょ先生」

しかし、皆が驚く中、寂園は何事もないかのように早く音楽を流せ
と言つた具合に再三促す。

すると、その要望に応えて音楽が流れはじめ、それに合わせてス
テップをダンストレーナーと共に寂園がステップを踏み、踊り始め
る。

そこからは、もう、寂園の独壇場だった。

一緒にダンスを踊つていたダンストレーナーに対して寂園はなん
とダンスを逆に指導し始めたのである。

「NO！ そこはキレ良くターンしないと見栄えが良くないヨ！ こ
う！」

スパンツとキレが良く可愛らしくターンを決めてそう告げる寂園。
ダンストレーナーはそんなダンスを目の前で披露する寂園に度肝
を抜かされたのか、目をまん丸くしている。

そして、音楽と共にダンスを踊りながらダンストレーナーである彼女に逆に寂園が次々と要望を出す。

もう、どちらが指導者なのか全く訳がわからなくなっていた。

しかし、明らかにダンストレーナーである彼女には悪いが、凛や未央、卯月が見た限り、寂園の方がダンスが圧倒的に上手いのである。

「…す、す…、何あの子…先生に逆にダンス指導してるよ…」

「ああ…うん、舞は本当、なんでも飛び抜けて上手いからね」

「飛び抜けすぎだよ！」

そう告げる凛に突つ込む様に声を上げる卯月。もう凛は寂園についていけず、早々にリタイアして2人のダンスを見守っている状態である。

寂園のダンスが上手過ぎて、先ほどまで卯月と未央がダンストレーナーに教えられていた振り付けが彼女の物の様に感じてしまう。

そして、ひとしきりダンスを終えるとダンストレーナーは息絶え絶えの状態だった。一方の寂園は何食わぬ顔で涼しげな表情を浮かべている。

「まだまだ行くよ！　ヘイ！　Stand up！」

「も、もう、ちょっと勘弁してください…」

「…ま、舞さん、今日はこの位に…」

そして、その凄まじい光景を見ていた武内Pが思わず仲裁に入つた。

息絶え絶えのダンストレーナーの姿を武内P見るのは初めてだ。それだけ、ダンスのレベルの次元が段違いに違っていた。その光景を見ていた卯月も未央も凛も思わずドン引きしている。

しかし、寂園は肩を竦めると涼しい顔つきでにこやかな笑顔を浮かべていた。

「Oh、OK！しようがないネ！　…じゃあ最後に私のdanceをしつかり見て覚えてネ？」

そう告げると寂園はいつも持ち歩いている音楽機器を淡々と設置すると、そこから、音楽を流しはじめる。

そして、いつもの様にハットを被ると凄まじいキレのあるステップ

を踏み、曲に合わせて身体を上下しはじめる。

そのテンポの良い曲に釣られて思わず、凜達3人も気がつけば身体が上下に動いていた。

寂園は持ち前の神がかり的な歌唱力を披露し、英語でその曲を歌い始める。

「bloodstains on the carpet♪」

そして、その声と寂園が繰り広げるダンスを目の前で聞いた武内Pは身体が硬直してしまった。

凄まじい歌唱力、異次元のダンステクニック、どれを見てもずば抜けている。あの、審査員が言っていた怪物という言葉がこの光景を目の当たりにして一瞬で理解できた。

綺麗で透き通る歌に鋭くそれでいて纖細なダンスに魂が震える。それは、その場で寂園の曲とダンスを見ていた全員がそう心から感じさせられた。

そして、驚くべきはその後の光景だ。卯月や未央を指導していたはずのダンストレーナーは寂園が見せつけたあるダンスに度肝を抜かされる事になる。

「!?:ゼログラビティですって!!」

そう、身体を斜めに倒しても決して倒れない、まるで重量を感じさせられない動き、ゼログラビティを部屋にいる皆の前で寂園は披露してみせたのだ。

ゼログラビティのトリックとして、寂園の靴は足首までを覆う形で、なおかつ、かかと部分にフックをひつかけるためのV字の金属のパーツのついた特殊なものをつかっている。

さらに音楽機材に含まれている床に簡単に設置できるT字型のフックに足を引っ掛けて、それを利用してこの技を行なつていた。

完璧だつた、その後のムーンウォークも全てが全て、天上の域、まさにその一言だつた。

寂園のダンスや歌を目の当たりにした未央と卯月と凜の3人は声を上げて驚きを露わにしている。

「凄い！ すごいすごい！」

「…どうなつてんのあれ…」

「舞、そんな技まで持つてるんだ…」

それからは、寂園の痺れるようなオностージが約1時間程度、繰り広げられる事になった。

だが、それについて誰も何も言おうとはしない、それは、彼女が凄いということを理解して尚且つ彼女のダンスや歌に魅力されているからだ。

そして、同時にこの光景を目の当たりにしている未央と卯月の2人のダンスの指導をしていたダンストレーナーは悟った。彼女に教えてもらうものはあれど教えてあげられることは何もないという事を。寂園はひとしきり歌を歌い終わるとハット外して皆に深いお辞儀をする。

「thank you very much!」

そして、その場にいた皆の底から湧き上がつてくるものは賞賛が込められた自然な拍手だった。

寂園はいつものように、柔らかい笑顔を浮かべて、ダンストレーナーの元に近寄ると手の平の甲にキスをする。

「sorry、ちょっと無茶な要求をし過ぎたわ。今度から気をつけるわね？」

「い、いや、いいの！　⋮それより私がむしろ貴女にまたダンスを教わりたくなったわ」

「本当に？　thank you、そう言つてもらえると光栄です。
princess」

寂園はにこやかに笑みを浮かべてその場からゆっくりと立ち上がる。そして、華麗にターンを決めると凛達に身体を向ける。

そして、いつものように飄々とした顔で凛に申し訳なさそうにこう告げる。

「ちょっとやり過ぎちゃったやつだよ！」

「やり過ぎちゃつたじやないでしょ！」

そして、養成所に凜の声が木霊する。

確かに凄かつたのは凄かつたが、まさか、養成所に来た初日から寂

園がダンストレーナーの心を折つてしまふとは予想もしていなかつた上にそのダンストレーナーから逆に指導を請われる始末。

それから、歌を歌い終え満足しきつた寂園が凜からしつかり怒られる事になつたのは言うまでもない。

アイドルになつた初日からダンストレーナーのダンスを逆に指導するというとんでもない離れ業を披露した寂園。

それから数日が過ぎ、新たに知り合つた本田未央、島村卯月と凛と寂園の2人は親交を深めていった。

そして、そんなある日、寂園は1人、武内Pからオフィスへと呼ばれる事になる。

「He11o、武内P。今日はどんな要件？」

「ああ…、その…。舞さんのデビューが決まりました」

「Oh、really? ようやくね、ちょっと待たせ過ぎなんじやない？」

そう言つて肩を竦めて告げる寂園。

彼女の場合はデビューするのに、もはや必要以上なものを兼ね備えているのですぐにでも人前に出したいという意図が会社側にはあった。

しかし、彼女が当初、提示した条件にデビューは米国でという条件が織り込まれていた為、こうして、彼女のデビューが予定よりもちよつと遅れてしまつていてある。

武内Pは申し訳なさそうに首元を搔きながら、寂園にこう告げる。

「すいません、舞さんは来週からアメリカです、ニューヨークにいる美城常務には既にこちらから報告をあげてますので」

「OK、ライブ会場は？」

「はい、しつかり押さえてます」

「流石、武内Pネ！」

その武内Pの言葉を聞いた寂園は満面の笑みでサムズアップをして上機嫌で彼に告げる。

こうして、寂園のデビューは米国でのデビュー、このような前例は前代未聞で今までそんな経緯でデビューを果たしたアイドルは武内Pも聞いたことがない。

だが、それに関して寂園は全く動じた様子もなくむしろ、待つてましたと言わんばかりの態度である。

それから養成所に向かう武内Pと寂園。

米国デビューに向けて、寂園の方も自分が考えた歌やダンスに磨きを掛けなくてはいけない。果たして、これ以上磨いたら、どうなるかはわからないが自分のパフォーマンスを見てくれる人には最高の夢を届ける。それが、寂園の考えるエンターテイナーの在り方だ。

「そういうえば、今日は城ヶ崎さんが来ていましたね」

「ん？ 城ヶ崎？」

「はい、346プロダクションの看板アイドルの1人です」

「へえ…、そうなんですね！ ジャア一応私の先輩？」

「そういう…事になるんでしょうか…」

そう言つて、寂園から視線を逸らす武内P。

正直、アイドルとしての路線というより寂園は自分をエンターテイナーとしての路線でデビューするつもりである。

だから、先にデビュした城ヶ崎は一応、先輩ではあるのだが、正直、彼女と寂園の技術や歌唱力は差は言うまでもなかつた。

だからこそ、武内Pは少しばかり危惧していた。

もし、寂園を目の前にした城ヶ崎の自信が粉々に打ち崩されやしないか、という不安である。

養成所の扉を開き、トレーニングを行う部屋へと入る武内Pと寂園。

すると、そこには既に卯月、凛、未央の3人が、やたら目立つピンク髪のギャル系な女の子の指導の元、ダンスの特訓を行なつていた。

「Hello、みんな」

「遅くなりました」

「あ！ 寂園と武内Pじゃん！ 遅いよー来るの！」

「H A H A H A ! sorry、ちょっと大切な話があつてネ！」

そう言つて、ダンスのレッスンの特訓を一旦止めて部屋に入つてきた2人に声をかける未央。

そして、凛と卯月の2人も寂園に近寄ると武内Pと何の話をしている

たのか気になり、彼女に問い合わせはじめた。

「今日はどうしたの？ 舞？」

「なんのお話をしてたんですか？」

「んー…。 デビュー？」

「ええ？ デビュー！ もうするの！」

そう言つて驚いたように声を上げる卯月。

その話を聞いていた、やたらと目立つピンク髪のギャル系な女の子が寂園と武内Pの側へとやつてくる。

見た感じ、派手な見てくれで整つた顔つきをしているが、彼女が3人のダンスの特訓をつけている姿は真面目そうに見えた。

「城ヶ崎美嘉よ、貴女が舞・K・寂園さん？」

「o h！ YES！ よろしくネ！ 美嘉！ 覚えたヨ」

「噂は聞いてるわ、ダンストレーナーが指導しきれないほどダンスが上手いんだって？」

そう言つて握手を交わしながらにこやかに笑顔を浮かべて話す美嘉。

寂園の噂はもう346プロダクションの中では出回つている。養成所に入った初日からダンストレーナーを遙かに上回るダンスの技術や凄まじい歌唱力を披露した事。

そして、彼女の為に開かれた特別なオーディションで審査員達の顔を青ざめさせた等、346プロダクションの中で彼女の名は知れ渡つていたのである。

「んー…まあ、ちょっとやり過ぎて、そこにいる凛からこつてり怒られたけどネ」

「あれは、明らかに舞が悪いでしょ？」

そう言つて、美嘉に苦笑いを浮かべてこちらを見てくる凛の目に視線を合わせる寂園だが、対して凛からは厳しい言葉が返つてくる。

すると、そのやり取りを見ていた美嘉は面白そうに笑いを溢していた。自分が問い合わせた質問が丸々事実だつた事が可笑しかつたからだろう。

「あはははは、噂は本当だつたんだ！ じゃあさ！ ちょっとダンス

みせてよ!」

「ん? oh! OK! それじゃ、簡単な音楽で良いかな?」

「ええ、構わないわ」

そう言つて、寂園の言葉に頷く美嘉。

すると、自分が作成した英語で作曲された音楽を養成所にある機材を使い流しはじめる寂園。

それに合わせて、寂園はいつものようにキレキレの動きで美嘉の前で踊りをはじめる。

美嘉と寂園の遠目から見ていた猫耳をつけた少女とロシア系ハーフで白銀の髪色をした少女をはじめとした養成所のトレーニング室にいた大多数の少女がそれを一目見ようと凜達の側までやつて来ていた。

「あれが噂の舞ちゃんにや?」

「あ、うん、そうだよ」

「彼女のダンスを見るのは初めてですね?」

そう言つて次々と興味本意で集まつてくる少女達。

しかし、音楽が流れはじめ、寂園はいつものようにダンスを踊りはじめるとそこにいる全員の空気が一変した。

身体を変幻自在に操り、綺麗なモデルの様な足を巧みに扱う寂園。

「…ま、マジですか!?」

「嘘…」

あんなダンスを真似しろと言われてもできる自信は到底、全員には無い。

そして、ターンもステップも日本人離れしたそれはもう、自分達と同じアイドルという枠からは完全に逸脱したものだった。

これを目の前で見せられた美嘉も感動するあまり言葉を失つてしまふ、目の前で踊る彼女の姿は一種の芸術品といつても過言では無い。

「ポウ!」

そして、乗つて来た彼女はついでに英語でその曲の歌も歌いはじめた。

リズム感が凄まじい、歌唱力も飛び抜けている。確かにこんなものをまざまざと見せつけられてはトレーナーも教えることはないと言いい切つてしまふだろう。

「ヘイ！ let, s come on！」

乗りに乗った寂園は手拍子をする様に促す。

それを見ていた全員は音楽のリズムに合わせて手拍子をはじめた。それからはムーンウォークをはじめとした、華麗なダンスをことごとく披露し、ターン、足技とキレキレな動きで皆を翻弄する。

しかし、キレた動きだけではない、静かにペースダウンする動きを織り交ぜながら動くダンスに皆が歓声を上げた。

「ロックだ！。ロックだよ！ これが私が求める理想像だ！」

「神に魅入られし者ね…」

ヘッドホンを肩からぶら下げた可愛らしい少女とゴスロリ衣装を身につけた人形の様に整つた容姿をした少女もまた感銘を受けた様に声を上げる。

寂園は踊りを披露しながら、凄まじい歌唱力で歌を歌い続ける。全員の鳥肌が本能的にザワリと立ち上がった。

そして、いつもの様に寂園は英語の曲を声高に叫ぶように歌いながら、全員にリピートする様に手で促す。

「who, s bad?」

「who, s bad!？」

そして、それに呼応する様に全員が声を上げる。

瞬間、音楽がぴたつと止まつたというのに彼女達は寂園の呼びかけに応え続けた。しかし、リズムはそのままに身体が勝手に反応する。

そして、何度も同じワードを繰り返す寂園のリピートに応える彼女達。自然と身体が反応してしまう、声が引き出されてしまうそんな不思議な現象だつた。

寂園は指をパチンと鳴らすと綺麗なターンを決めて曲を締める。

「: who, s bad?」

そして、寂園は曲を終えると共に見ていた城ヶ崎美嘉との間合いを一気に詰めて、手を掴みニコリと笑顔を浮かべたまま首をかしげると

一言そう告げる。

間合いを詰められた美嘉は思わず顔を真っ赤にしていた。

男性経験が無い城ヶ崎美嘉からしてみれば同性であるにも関わらず、その動作一つ一つが魅力的で寂園のその行動が曲も伴つて、危険でちよつと危ない王子の様に感じてしまったからだ。

そして、曲を終えた寂園は美嘉から手を離すと皆の方に振り返り、楽しそうな口ぶりでこう告げる。

「…とまあ、これが女性ファンを増やすやり方だネ！ do you understand？」

そう言いながら黒髪をサラリと流して皆に告げる寂園はいつもの様に何事もなかつたかの様に振る舞う。

それを見ていた皆は全力で左右に首を振つた。とてもじやないがあんな寂園の様に振る舞うなんて自分達にはできそうに無いと心の底からそう感じたからだ。

美嘉は呆然としたまま、顔を真っ赤にして口をパクパクとしている。

「凄い！ 凄いよ！ 寂園ちゃん！」

「ねーねー！ 私にもダンス教えて！」

「H A H A H A ! OK ! OK ! 大丈夫だヨ ! いいよね ? 武内P ?」

「ええ…それは構いませんが…、その前に皆さんにお伝えしなければならない事があります」

ダンスを教えてくれとせがむ少女達に囲まれる寂園に武内Pからの肯定する様に頷く。

しかし、その前に皆に伝えなければならぬ重要な事柄があつた。それは、寂園に関しての事だ。

「え？ 何々？ 発表つて…」

「ついに私達のデビューが決まつたとか！」

色々な憶測を立てながらワクワクと武内Pからの言葉を待つ少女達。

養成所でトレーニングを積んできた子達は早くデビューしたい気

持ちを持っていた。

だからこそ、今回、武内が話す事は彼女達の良い刺激になる。

これは、シンデレラプロジェクトに参加するみんなの大きなモチベーション向上にも良い影響を与える、そう武内Pは思っていた。

みんなは武内Pからの言葉に静かに耳を傾ける。そして、彼の口から語られる衝撃的な言葉はその場にいた全員が唖然とさせられるものだった。

「舞さんのデビューが決まりました。アメリカでのCD活動、及び、ライブを予定中です」

「え…」

そして、その言葉に静かに声をこぼす人物が1人いた。凛である。周りは物凄い事だと、寂園を褒める様に騒ぎ始める。確かにあのダンスや歌唱力をまざまざと見せつけられてはデビューするのは当たり前だと感じざる得ない。

だが、デビュー先がアメリカ、スケールが違いすぎると彼女達は寂園に日々に話す。

しかし、それを遠目で見ていた凛はギュッと手を握り締めていた。寂園がまた遠い所に行ってしまう。今でも遠い場所なのになんだか置いていかれるようで凛は胸が締め付けられる様だった。

「ごめん…ちょっと席外す…」

「あ、凛ちゃん！ ちょっと！」

そして、立ち去る凛を呼び止めようとする卯月だが、凛は早足での養成所の扉を開くと外へと出て行ってしまった。

もちろん、それを目の当たりにした武内Pは彼女の後を追おうとするが、それよりも先に動いた人物がいた。

「ごめん、武内P、ちょっと後お願ひネ？」

「ま、舞さん」

「私に任せて？OK？」

そう言つて武内に告げる寂園。

飛び出していつた凛の姿を見つけていた寂園は彼女の様子がおかしいことを既に察していたのである。

寂園の言葉に力強く頷く武内P、それに応えるように寂園もまたサムズアップして笑顔で応えると養成所の扉から飛び出して出て行つてしまつた。

米国デビューが決まつた寂園、はたして、それに対して凛が何を感じていたのか、この時、皆は何も理解できていなかつた。

養成所から何故か飛び出していった凛。

寂園とのレベルの違いを実感させられたからか、はたまた、彼女が遠くに行ってしまうことからの焦りからかそれはわからない。

「何やつてんだろ…私」

養成所から飛び出して、空を見上げる凛はそう1人で呟く。

初めて、寂園と出会った日からこんな風になることは鼻からわかつていた事だ。彼女の天賦の才も全て桁外れたもの、それを最初から追いかける側だつた。

だけど、彼女の背中がどんどん遠くへ行つてしまう。彼女の隣で歌いたい、踊りたいのに自分を置いて行つてしまふ。

「…ここに居たのネ、リン」

そして、飛び出してきた凛の背後からその目標にしている彼女の声が聞こえてきた。

その声はいつものように優しい声だった、まるで、最初から凛がこうなる事がわかっていたようであつた。

凛はゆっくりと声をかけてきた寂園の方へと振り返る。この世界に自分を連れてきたのは他でもない彼女だから。

「なんで出て行つたのかは…、大方予想がつきますネ」

「…なんで…」

「追つて来たのか、でしょ？ それは、私の大切な friends だからね」

そう言うと、寂園は笑顔を浮かべたまま、ゆっくりと凛に近寄つていく。

彼女はポケットからある物を取り出すとそれを凛に手渡しはじめた。

その寂園の行動に目を丸くする凛、だが、寂園は笑顔を浮かべたまま静かにそれを受け取るように凛に促した。

凛は寂園から手渡されたそれを静かに受け取る。そこにあつたの

は一枚の紙、しかし、その紙には寂園の大切な思いが込められていた。

「私が書いた作曲した曲ネ。凜の為の曲だよ」

「作曲…。舞がしてくれたの？ 私の為に？」

「Y E S！ 凜はお姫様で私は魔法使いダヨ！ 魔法使いにもMPがいるでしょ？だから今回の米国デビューは私のMP回復の手段に過ぎないの！」

「いた…、ん…」

そう言うと寂園はコツンと凜の額を指で軽く小突く。

小突かれた凜は額を軽く押さえながらムスッとした表情を浮かべていた。米国デビューというスケールが大きい事を寂園はたかだかMP回復だと言い切る。

そんな例えを寂園の口から直接聞かされれば凜もなんだか大した事がないように不思議と思つてしまつた。

「凜はちよつと難しく考え過ぎネ、私の隣で歌つたり踊つたりしてくれるんでしょ？」

「……舞、覚えててくれたんだ」

「凜のD R E A Mだからね、当たり前だよ」

そう告げる寂園は静かに凜の言葉に頷いた。

初めて凜と一緒にバーの奥部屋でダンスの練習を行つた日のことを寂園は忘れてなんかいない。

寂園のようなエンターテイナーになりたい、それが凜の目標であり、この346プロダクションに来た理由だ。

その事を寂園は理解していた。だからこそ、焦る気持ちを抑えきれない凜の心境も察せる。

寂園はひとまず凜に自分が手掛けた曲を手渡した後、さらに、紙を取り出すとそれを彼女に手渡した。

「凜、あと、これ私が米国行つてる間のトレーニングメニューね」「これ…」

「私が組んだトレーニングメニューだヨ♪」

そう言つて凜が手渡された紙にはビツシリと書かれた練習と食事の献立などが書かれていた。

これを見た凛は思わず目を見開く、まさか、自分達の為に寂園がここまでしてくれるとは予想もしていなかつたからだ。

すると、寂園は紙に釘付けになる凛にこう話しを続ける。

「私が居ない間はそれをキツチリやる事ネ、帰つてたらちやんと見るから、あ、卯月や未央と一緒にやつても大丈夫だヨ」

「舞…。ありがとう」

そう言つて、凛は寂園に抱きついてお礼を述べる。彼女は自分を置いてつたりするつもりは最初からなかつたと、それが、とても嬉しかつた。

そして、凛に抱き着かれた寂園はと言うと驚いた様な表情を浮かべるが、親愛を込めたハグはアメリカでもよくある為、それを受け入れて優しく凛の頭を撫でた。

まるで、凛の面影がかつていた自分の娘の面影と重なる様に感じる。彼女もまた、自分の手からは離れて、アメリカで立派なスターになつた。

凛の頭をしばらく撫でた寂園は彼女の肩を掴むとゆつくり引き離した。そして、親指で養成所を指差すと凛にこう告げる。

「さ、それじゃ returnするヨ、みんな待つてるからネ」「うん」

そして、凛は寂園と共に養成所へと帰つていった。

これから先、凛はきっと物凄い可能性を秘めている。それは、養成所にいる卯月や未央達も一緒だ。

だから、夢見る彼女達に自分が魔法をかけてあげなくてはいけない、寂園にとつて、シンデレラは彼女達なのだ。

それから、二週間程の期間が経つた。

寂園は予定通り、CDデビュー、及び、ライブを行う為、飛行機に乗り込み、アメリカへと渡つた。

また、日本では凛達も寂園に言われたトレーニングを行ひながら 3 4 6 プロダクションから CD デビューを行う事に成功。

そして、他のシンデレラプロジェクトも順調に進行、バラエティ、写

真撮影、そして、演劇などいろんなジャンルに個性的な様々なアイドル達が台頭していく。

そんな中、日本のニュース番組で衝撃的なニュースがこの日、日本中を駆け巡る事になった。

『次のニュースです。米国で活動中の346プロダクション所属の舞・K・寂園さんのデビュー曲を収録したCDが歴史的な売り上げを記録し、デビュー曲にも関わらず全米チャート1位にランクインしました』

それは日本で活躍しているアイドル達が衝撃を受けた日だった。

まさか、米国デビューした日本の新人アイドルが米国チャート1位を取った上にCDで歴史的な売り上げを記録するという偉業を打ち立てたのである。

しかし、アメリカのメディアでは大々的にこう報道される事になった。

『キングの凱旋』『ポップ界の神の帰還』と。

そう、聞く人が聞けば、やはりわかるのだ。彼女が一体どの様な存在で、一体、どれだけの価値がある人物であるのか。

そして、熱狂的なファンは寂園のライブを聞くたびに涙を流す。ああ、そうだ、彼女こそが『それ』なんだと。

アメリカと日本に激震が走る中、346プロダクションではこの日から四六時中電話が鳴りっぱなしである。

マスコミ、メディアはこそつて彼女を掘り当てた人物を取材しようと346プロダクションには人だかりができていた。

「すいません！ 本田未央さんですよね！ 同じプロダクション所属の舞・K・寂園さんについて何か一言頂けませんでしょうか！」

「あ！ 渋谷さん！ すいません一言お願ひします！」

そして、その情報を一言でも聞こうこそつて346プロダクションのアイドル達にインタビューを迫る始末。

これには、流石の武内Pも頭を悩ませていた。

これ以上のメディアの押しかけは確かに346プロダクションの仕事を増やす事にも繋がるが同時にアイドル達のストレスにも繋

がつてしまふ。

しかも、現在ニューヨークにいるあの美城常務から先日連絡が来た時は自分も耳を疑つてしまつた。

『彼女をどうにかしてくれないか、頭がどうにかなりそうだ』と役員を通して通達があつたのである。

彼女とはおそらく、寂園の事だろう事は武内Pには容易に想像がついてしまつた。

「ほんとに…全米チャート1位を取るなんて…」

これには武内Pも頭が痛くなる。

だが、ここでなんと、さらに頭が痛くなる出来事が武内Pに降りかかる事になる。

なんと、米国から急遽、いろんなスケジュールを終わらせた寂園が帰国してくるというのだ。

346プロダクションは大慌てである。
しかも、今回はニューヨークにいる美城常務も共に帰国するというダブルパンチだ。

会社側は波乱の連続であつた。シンデレラプロジェクトもそうだが、346に所属する他のアイドル達もザワつき大慌てする346プロダクションに振り回されっぱなしである。

そして、寂園を乗せて出発した飛行機は米国から日本へと無事に到着。

到着した飛行機の出入り口ではマスコミが殺到していた。彼女を一目見ようと日本のファンも多く、物凄い人々で空港が埋め尽くされている。

「ふう、ようやくついたネ、みつしー早く行くヨ！」

「…その渾名、どうにかならないのか…」

「えー、みつしーが私とduet組んでくれるまでずっと続けるヨ？」
「胃が痛い…」

そう言つて、美城常務を傍らにボディガードで周りを固めて、寂園

は日本の空港を米国チャート1位を引っさげて凱旋する。

あらゆるところからシャツターフラッシュと悲鳴の嵐である。し

かし、寂園はいつもの様に気ままにカメラに手を振つたりピースサインをしてそれに応えてあげる。

そして、隙さえあればいつの間にか日本のファンの子供の色紙にサインを書きに行く始末だ。

美城常務も自由奔放な彼女に振り回されっぱなしで目を離せばいつの間にか居なくなつていて、事がアメリカでも頻繁にあつた。

例えを挙げるなら、夜のブロードウェイのど真ん中で人々を集めて路上ライブを繰り広げる始末である。

そんな自由奔放な彼女を傍らに管理するのが、気が気でない毎日を送つていたのである。

彼女に美城常務がどうしたら大人しくなるのかと聞いたところ、武内Pがいれば多分大丈夫だと寂園が答えたものなので藁にも掴む思いで先日、電話を日本に繋いだ訳なのだが…。

しかし、日本の346プロダクションも対応に追われているためそれどころじやない事を悟ると、流石の美城常務も諦めるしかなかつた。

「…舞、お願ひだから、突然いなくならないで」

「oh、みつしー顔色悪いね、大丈夫?」

「ええ、おかげ様で」

「H A H A H A ! みつしーもなかなかj o k eが上手くなつたネ！」

「……」

向こうでもずつとこの調子である。

明るい事は彼女の良いところではあるのだが、毎回、胃を痛めている美城常務は顔を引きつらせるばかりだ。

これ以上、何かあつて欲しくない、そう心から願つていた。予想外の出来事はもう散々アメリカで体験したし、まさか、何かあるとは思えない。

すると、空港の出入り口付近で何やら見覚えのある人物がこちらに手を振つている。

多分、幻覚か何かだろう、美城常務はそう思う事にした。こんな、空

港の入り口にまさか彼女が来ているはずがない。

「おい！ あれ…」

「ひ、日高…、あれって引退した日高舞じゃないか！」

どうやら、美城常務は幻覚を見ていたわけではない様だった。

なんと、満面の笑みで寂園を出迎えていたのは芸能界をとっくに引退したはずの日高舞の姿があつたのだから。

主婦の様な格好をしているが間違いない、日高舞である、なぜ、彼女がここにいるのかはわからないが大方予想はついていた。

「へイ！ youがMs. 日高？ 私は舞・K・寂園。よろしくネ！」

「Hello！ 初めまして日高舞よ！ こうして会えるなんて光榮ね！ 貴女の曲聞いたわよ！ ビビッと来ちゃつて！ そのままこつちに来ちゃつた♪」

そう言つて満面の笑みを浮かべて空港の出入り口付近で寂園と握手を交わす日高舞。

引退した筈の彼女が何故ここにいるのか、報道陣は理解できないが、これは大事件だつた。

そして、隣にいた美城常務はとすると、力なくパタリと日高舞の出現というショックキングな出来事のあまりその場で倒れてしまう。

「美城常務！ 美城常務が倒れたぞ！ 救急車！」

そして、ガードマンがすぐさま救急車を呼ぶために電話で話していた。

それを見ていた寂園は肩を竦めると苦笑いを浮かべ、握手を交わしている目の前にいる日高舞にこう告げ始める。

「oh, sorry、今日のところはゆっくり話せそうにないネ！ 来週あたり、レストラン予約しておくからそこで本題でもどうですか？ princess?」

「princessだなんて！ 是非ご一緒させてくださいな♪

色々聞きたい事があるんですよ私も」

「really？ それは楽しみね！ それじゃ今日のところはこれで…」

そう言うと、被っていたハットを外して日高舞にお辞儀をする寂園

は、そのまま先導されると空港の外で待機させてあつた車に乗り込みその場を後にする。

一方の美城常務も駆けつけた救急車に運ばれ、帰国早々、病院に急行する羽目になってしまった。

そんな、カオスな状況に目をまん丸くする空港に取り残された報道陣と寂園のファン達。

日高舞も寂園が立ち去るのを見送るといつの間にか彼ら達の前からいつの間にか姿を消していた。

これが、『ポップキング帰国事件』と見出しを打たれて翌日の週刊誌を賑わせる事になったのは言うまでもない。

美城常務と共に全米チャート1位を引っさげてアメリカから帰国した寂園。

空港で日高舞と会うというサプライズに遭遇しながらも彼女は迎えた車に乗り、凛達が待つ346プロダクションへと帰つてくる事になった。

美城常務は残念ながら、急遽、救急車に運ばれるという出来事があつたが、久々の帰国と凛達に会う事を寂園は心待ちにして居た。「むつふつふー、凛元氣にしてるかな？」

そして、寂園が乗つた車は346プロダクションの前で止まる。当然、346プロダクションの前には大勢の記者団が詰めかけていた。全米チャート1位を取る超新星の寂園から何か一言でも言葉を貰うためだ。

しかし、寂園の周りはガードマンがきつちりと固めて、記者団が必要以上に近寄れないようにしている。

「寂園さん！ 何か！ 何か一言！」

「通して通してー、入れないヨー」

「全米チャート1位を取つた心境などを…」

「また今度ねー♪」

そう言つて、あしらうように記者団を撇いて346プロダクションの中へと入つていく寂園。

正直、寂園は全米チャート1位を取ればこうなることは最初から分かり切つていた事だつた。

これは、346プロダクションも大変だつたろうなと素直に彼女はそう思う、美城常務も倒れてしまう訳だ。

後で病院にこつそり見舞いに行つてあげようと寂園は思いながら、いつものようにシンデレラプロダクションの養成所へそのまま足を運んだ。

「へイ! everyone! 元気にしてましたか?」

そして、元気よく養成所の扉を開き声を上げる寂園。

その寂園の姿を見た皆は嬉しそうに声を上げながら近寄っていく、彼女達はにこやかな笑顔を浮かべたまま、寂園の帰国を快く迎えた。

「あー！　帰つて來た！」

「おかえりなさい！　ニュース見たよ！　凄いよね！　全米チャート！」

「o h ! t h a n k y o u n e !」

そして、彼女に賞賛の言葉を贈る少女達。

寂園は握手を交わしたり、ハグをしたりしてそれに応えてあげる。自分のせいで余計な気苦労をさせてしまつたにも関わらず彼女達の反応はとても優しいものだつた。

続いて、寂園の姿を見た凜達3人もゆつくりと帰つて來た寂園を迎えるようにやつてくる。

寂園はそれを見ると優しげに笑いながら、いつものように凜の前に立つと一言、彼女にこう告げる。

「ただいま、凜」

「おかえり、舞」

2人は互いに笑い合い、そう言うと親愛を込めた握手とハグを交わした。

寂園からしてみれば、そんなに長い間、日本を離れていたつもりは無いのだが、凜を1人置いて自分だけアメリカに行つた事については多少なり申し訳無さもある。

後は寂園が気になつたのはあの連日訪れているだろうマスコミだ。346プロダクションの前にいるあれをみればこちらも大変だつたんだろうなと彼女は思つていた。

「迷惑かけたね、みんな」

「ふつふつふ、なんの、我が力を持つてすれば有象無象の衆など他愛もなき存在」

「蘭子ちゃん…」

「おー、蘭子はゲームをするのですか！　今度一緒にやろうヨ！　R P G大好きだからネ！」

「!?　おお！　我が同胞がまた一人！　神に導かれし同志よ！」

そう言つて、少女の言葉に応える寂園。

それを聞いた銀髪をリボンでツインテールにし、フリルのたくさん付いたゴシック服を着る神崎　蘭子は嬉しそうな表情を浮かべていた。

それに、蘭子の言葉を聞いた寂園は神妙な面持ちで何やら考え込むとこんな話をしはじめる。

「o h…なんだか新しいフレーズが浮かびそうネ」「今ので!?」

「まあ、でも蘭子ちゃんの言う通り、マスコミさんたちが来るお陰で私達の仕事もたくさん増えましたからね」

そう言つて、蘭子の言葉からフレーズを考えようとする寂園にツツコミを入れる未央と、寂園の件で押しかけてきたマスコミについて良い面を語ってくれた卯月。

寂園はそんな2人の言葉に笑顔を浮かべて笑い声をあげる。

そんな中、猫耳を付けた少女、前川みくは寂園の手を握ると目を輝かせてこう彼女に話しだした。

「舞のお陰でバラエティの仕事がたくさん来てくれて助かつてんにや！　ありがとう！　！」

「o h、そうでしたカ、バラエティなら海外でやつてるファミリードラマのj o bを紹介できるけどみくにyan t r yしてみる？」

手を握りお礼を述べる前川に満面の笑みを浮かべてそう告げる寂園。

サラッとだが、彼女は海外のバラエティドラマの役の仕事を前川に紹介しようとしている。

これには彼女達も度肝を抜かされたように仰天していた。向こうで本当に何をしてきたんだと言うレベルである。

「マジかにや!?　海外のファミリードrama!？」

「H A H A H A !　もちろんユニットでネ♪　j o k eも英語も練習しなきゃだけどネ！」

「え、英語は苦手にや…、けど仕事の為なら頑張れるにや！」

「数ヶ月後…、そこには猫語尾を忘れ、舞口調になるみくにやんの姿があつたのだつた…」

「本当になりそだからそんな不吉な事を言うのはやめるにや!?」

そう言うと、悪戯そうに笑みを浮かべている未央にツツコミを入れる前川。

どうやら、寂園の話を詳しく聞けば舞台はサンフランシスコで『おいたん』と呼ばれるおじさんを含めた愉快な家族の日常を描くバラエティドラマだとか。

それを聞いた全員は顔を見合わせる。それは、日本でも夕方あたりに放送されていたドラマではなかつただろうかと。

「まあ、バラエティだからね！ 楽しくjokeが上手いみくにやんなら大丈夫だヨ！」

「それは果たして褒めてるのかにや!?」

褒めているのかどうか果たしてわからない寂園の台詞にツツコミを入れる前川。

しかし、皆も笑顔にして明るく振る舞う彼女達ならそんな仕事も成長次第ではこなせるだろうという確信が寂園にはあった。

プロデュースの技量も寂園はある。彼女達に合う仕事を紹介してくれと頼まれば、自分や知り合いに頼み技量を伸ばしてその仕事を振つてあげられる。

ただし、そこには海外に限るという条件つきではあるが…。

「あ、そうだつたネ、そう言えば大切なこと言うの忘れてたヨ」

「ん？ 大切な事？」

そう言うと、大切な事を言い忘れていたことに気がついた寂園はポンと手を叩く。

それを聞いていた凜は不思議そうに首を傾げて彼女に訪ねた。言い忘れていた大切な事とは果たしてなんだろうと。

すると、にこやかな笑顔を浮かべている寂園は次の瞬間、信じられないような言葉を凜達に告げはじめた。

「そうだヨ！ 実は、日本全国と全米を回つてライブを予定してるんだけどネ、それのバックに卯月、凜、未央の3人を指名したんだヨ」

「…え？」

「曲のレパートリーはたくさんあるからネ！ デビュー曲がまだ全米チャート1位だけど、もう新曲たくさん作ってるんだ♪」

寂園は啞然とする凜にてへつと可愛らしく言いながら、自分が作成した曲の数々を見せる。

そして、ライブをやるからにはもちろん、それらの曲の振り付けやら、英語やらを身につけなくてはならない。

それを聞いた未央と卯月の2人の顔から血の気がそつと引いていくのを感じた。しかし、寂園は相変わらず満面の笑みである。

「大丈夫だヨ！ ダンスと歌の指導には私が付くからネ！ 後、バックの曲なんだけど…」

そう、寂園が話をしはじめようとした矢先の事だった。

扉が開き、珍しいリーゼント風の髪型をした女の子が部屋の中へと入ってくる。

それは、テレビで346プロダクション売り出し中の人気ロックアイドル。

「…もしかして、ロックアイドルの木村夏樹ちゃん!?」

「どうしてここに！」

「武内Pから呼ばれてね、なんでもアタシを『指名だつて聞いたけど』『oh! なつきち！ 待つてたよ！ 今回、私のライブのバックでギターを引いてもらう、なつきちに…』

そう言つて、一旦、そこで言葉を区切る寂園はツカツカと歩いていくとヘッドホンを首からかけている少女に近寄るとガツシリと肩を掴んでにこやかな笑顔を浮かべて再び話を切り出す。

「リーナね！ バックのギターよろしくね♪」

「え…、ええ！ 私⁈」

「そうだヨー、なつきちのギターは向こうでCDをちょっと聞いてたからわかるけどネ！ ロックなアイドル目指してるんでしょ？ リーナ？」

そう言つて、寂園が肩を掴んだ少女、多田李衣菜は彼女の言葉に度肝を抜かされたように仰天した。

まさか、自分が寂園からライブのバックでギターを弾く役目を担う事に指名されるとは思わなかつたからである。

李衣菜に限つてはまだギターを練習しはじめたばかりで、まだまだ人様の前で披露できるような腕前ではない。

それに、この場に呼ばれた木村夏樹も同じくそうだ目が肥えた全米の外国人に向けて披露する技術を持ち合わせてはいない。寂園の言葉を聞いた彼女は目を見開いたまま言葉を失つていて。

しかし、寂園はそんな事は全く気にしてないかのように凜達を含めて計5人の指名を終えると、にこやかな笑顔を浮かべてサムズアップしながらこう話をしはじめた。

「大丈夫ダヨ！　話は通してあるからネ！　超一流の指導員用意して
いたからdon, t worry ダヨ！」

「…ええ…、嘘だよね…」

「期日はまだまだ半年くらいあるからネ！　no problem
！　それじゃ5人はちょっと今から移動するヨ！」

「マジで！　今からあ⁈」

そう言つて、凜達5人にウインクをする寂園に声を上げて驚いたような表情を見せる未央。

それから、5人は共に支度を済ませて彼女の先導のもと養成所から移動を開始する。

日本全国、そして、全米を回るライブまであと半年、一体、寂園はどうの様にして彼女達のレベルを上げようと言うのか。

彼女達が連れてこられたのは、凜が前に一度寂園から連れられて訪れたことのある場所。

そう、トムが営業している隠れ家的なバーである。その奥部屋へ彼女達は寂園に連れられて入つて行く。

そこに居たのは、ギターを弾いている1人の外国人の男性の姿があつた。

その外国人と寂園は握手とハグを交わし、親交を深めて何やら英語で話を繰り広げている。

「誰だろうあれ…舞ちゃんの知り合い？」

「凛ちゃん知ってる?」

「いや、知らないけど…」

凛に親しげに会話を繰り広げている舞と外国人の男性2人について訪ねる卯月と未央の2人。

しかし凛は、それに対し左右に首を振り知らないと一言だけ告げる。

だが、それを見て驚いている人物がこの中で1人だけいた。

「…おい…、おい、待て、嘘だろ」

「どうしたのなつきち?」

その光景を目の当たりにしていた人物。

ロツクなアイドルを掲げて活躍している夏樹はワナワナと震えていた。まるで、信じられない者を見ている様な眼差しである。

それを見ていた李衣菜は様子がおかしい夏樹の態度に思わず首を傾げる。

すると、話を終えた寂園は再び凛達のところに戻ってくる。

「紹介するヨ! アメリカで活躍して私の親友のSさんネ! お忍びで来てくれるから皆、Sさんと呼ぶ様にネ!」

「いや! その人どう見てもスラツ…」

「なつきちとリーナのギター指導員だからネ! ギターの腕なら抜群だからすぐに上手くなるヨ!」

そう言うと、夏樹の言葉を遮る様にスパツと言い切つてしまふ寂園。

それから、寂園から紹介されたSさんはにこやかな笑顔を浮かべて、指導する夏樹と李衣菜に近寄ると2人と握手を交わしはじめる。

夏樹は手を震わせながら、彼と握手を交わしていた。その表情は普段、ステージに立つクールな彼女とはかけ離れたものである。

「H A H A H A ! n a t s u k i ! n i c e t o m e e t
y o u !」

「…ひ、ひやい! よ、よろしくおねがいしまひゅ!」

「なつきち!? ど、どうしたの!?」

「H A H A H A ! 仲良くなつてくれて良かつたネ!」

「いや…、舞、あれ夏樹ちゃん、緊張のあまり強張つてるだけだと思うよ」

そう言うと、震える夏樹と握手を交わすSさんを見ていた凜は苦笑いを浮かべて顔を引きつらせている。

そして、自己紹介が終わり、ひと段落がついたのを見計らうと寂園は部屋の奥にツカツカと歩いて行く

その後、寂園は部屋の中を暫く歩くと部屋に飾つてある二本のギターを両手に持つて、夏樹と李衣菜に質問を投げかけはじめた。

「ところで、ギターの練習なんだけどサ、エルヴィスとジミーどつちがいい？」

「お、おい、待て！ ほんとにちょっと待つて！ エルヴィスつておまつ！ ジミーつて嘘だろ！」

「夏樹はエルヴィスでいいね！」

「待つて！ お願ひ！ ちょっと待つて！」

あの木村夏樹が狼狽えている。こんな姿を見るのは凜達も李衣菜も初めての光景である。

神様2人のギターを選べと言われたらそういうのも無理はない、年季が入ったギターを震える手で寂園から受け取つた夏樹は涙を流しながらそれをジッと見つめている。

そして、震える手でそれに触れる夏樹、それは正しく本物である。ギターに触れている夏樹はあまりの感動にこう咳いた。

「…もう、ここで死んでもいい」

「o·h·! そんなに喜んで貰えるとは思わなかつたヨ！ それ、夏樹にあげるネ！」

その言葉を聞いた途端、嬉しさと感動と寂園の口から告げられた言葉のショックのあまり夏樹はその場でバタンと倒れてしまった。

それはそうだ、ロック好きならこの数億円を軽くいく神様のギターを寂園の様なものすごい軽いノリであげるなんて言わればそういうだろう。

それを見ていた李衣菜は突然の出来事に目を見開いて仰天する。

「な、なつきちー!?」

「夏樹さんが死んだ!?」

まさか、その場で夏樹がぶつ倒れるとは想像もしてなかつた凜も思わず、そう言葉をもらしてしまう。まさか、彼女がここまでなるなんて予想外だったからだろう。

Sさんは呑気な2人して笑つてゐる始末である。

こうして、半年後に控える寂園の日本と全米ライブに向けての5人の特訓は開始される事になつた。

さて、半年後のライブに向けて動き出した寂園達。

そんな中、寂園は美城常務の見舞いを兼ねて病院まで花束を持ってやつて来ていた。隣には武内Pと凜がいる。

寂園は選んだ花を見つめながら、倒れた美城常務の安否をちょっとだけ心配していた。

「まさか空港で倒れるとは思わなかつたネ」

「いろいろ無理してだからじやない？」

「まあ、最近は忙し過ぎたからちよつと疲れちゃつたのかもネ、ああ、見えてみつしー乙女だからさ」

そう言いながら病室の扉を開く寂園。

するとそこには、いかにも不機嫌そうに病室のベットに座つている美城常務の姿が2人の目に入つてきた。

どうやら、あまり機嫌がよろしくなさそうである。それを見た武内Pは寂園の耳元でこう訪ねる。

「ど、らへんが？」

「o h : 。んー、多分、化粧にちよつと手を掛けすぎるとことか？」

そう言いながら、ジョークを交えつつ寂園は笑みを浮かべ、1人でにH A H A H A ! と笑つていた。

しかし、病室のベットの上にいる美城常務は変わらず不機嫌そうな表情を浮かべたまま、歩いてくる寂園達をジッと見つめている。

そして、美城常務のベットの前に立ち止まつた寂園は首を傾げながら、開口一言めで、武内Pには信じられない言葉を彼女に投げかける。「o h 、そんなに目力つけてもXメンみたいにレーザーは出せないよ、みつしー」

「私が：レーザーを出すためにこんな表情してると思うか？」

「みつしーならできそうだヨ！自信持つて！」

そう言いながら、満面の笑みを浮かべて、花束を美城常務に手渡す

寂園。

美城常務はその言葉に呆れたように天井を思わず仰ぐ、そのやり取りが可笑しかったのか、周りの看護師からはクスクスと笑い声が溢れていた。

目からレーザーを出すのに自信も何もあつたもんじやないが、寂園のくだらないジョークのおかげで美城常務の言いたい事が全部、どつかに飛んでつてしまつた。

そして、武内Pは親しげに話す寂園と美城常務のやり取りを見ながら思わずこう声を溢してしまつた。

「み、みつしー？」

「私はやめろと言うんだが…この娘がやめなくてね…」

「だつて可愛いじやんみつしー！女子高生に戻つた気分になるでショ？」

「……私が全米チャートが取れたら呼んでもいいと言つたばかりに…」

…

「ほんとに取つちやうもんね舞」

そこには悔やんでも悔やみきれない美城常務の後悔の念があつた。まさか、ほんとに彼女がデビューしてすぐに全米チャート1位を取つてしまふなど予想もついてなかつた。

そのご褒美として、彼女が美城常務に要求したのはデュエットを組んで踊つて欲しいという要求だ。

しかし、美城常務には立場がある上にそれは叶える事が出来ないお願いだ。そして、その代わりに寂園が要求したのが美城常務へのあだ名である。

「約束は約束だからネ！」

「…だから私は君に通達を出してもらつたんだよ武内くん」

「心中お察しします」

日々、自分に降りかかる寂園のアメリカンジョークや行動に振り回されつ放しのニューヨークでの生活。

ニューヨークでの2人のやり取りを見ていた346プロダクションの幹部達はこう語る。まるで、ホームドラマを観てるような感覚だつたと。

確かに、向こうでもこんな調子ならホームドラマを観てるような錯覚に陥るのも仕方ないだろうなと凜と武内Pも思つた。

「それで今日は何の用だ？」

「お見舞いだヨ、はいお花と果物」

「あー…、気持ちはありがたいんだが…、今日で退院だ、君は私に長らく病院にいろと？」

「Oh、そう言うと思つて仕事用のノートパソコンもきつちり持つて来たヨ」

「…お気遣いありがとう」

はあ、深いとため息を吐く美城常務、余計なお気遣いだ。遠回しにしばらくここで休めと言われてるようなものである。

これには看護師達も笑いを溢していた。そんな2人のやり取りを見ていた武内Pは思わず、寂園の美城常務への対応に戦慄する。

346プロダクションでも彼女にこんな風に接する事が出来るのはおそらく彼女くらいなものだろう。

美城常務はノートパソコンを開くとカタカタと書類の整理をはじめながら、こう話をはじめる。

「舞は話を少しば聞く事を覚えることね」

「今がそうよ」

その通りだから困ると凜も武内Pも納得してしまう。いや、話を聞いてはいるのだろうが、だいたいノリと勢いで内容がぶつ飛んでいつているようだ。

そして、そんな中、寂園はというと肩を竦めて首を傾げながら挙句にこんな事を言い始める。

「H A H A H A！ ところでさつきまでなんの話してたんだつけ？」

「…………」

「…………うん、これは美城常務も倒れちゃうよ」

さぞ、苦労したんだろうなと察する凜はポワポワした寂園の言葉に思わず頭を抑えてそう呟く。

そして、お見舞いも終えた彼女達に病院のベットの上にいる美城常

務はひとまずこう告げ始める。

「私の事はいいから、舞、貴女、今日は仕事があつた筈で…」

「あー、あれ全部キャンセルしといたヨ！ 凛達見なきやいけないからネ♪」

「…貴女つて人は…」

何故こうも思い通りに動いてくれないのかと言いかけて、美城常務は諦めたようにため息を吐いた。

確かに、半年後に行われる全米、日本全国ライブに向けての下準備を行わなければいけない事は美城常務も理解している事だ。

しかし、ケロツとした表情で寂園からそんな風に言われては美城常務も思わず頭も痛くなつてくる。

「…木村夏樹と多田李衣菜は？」

「今、ギターの猛特訓中だネ♪ 多分、半年後にはすんごいレベルになつてるヨ！」

「それならいい」

「練習になつきにはエルヴィスのギター、李衣菜にはジョンのフォークギター使わせてるからそれはtechnicもついてくるヨ♪」

「…おい、ちょっと待て、君は今さらりとなんと言つた？」

そう言つて、サラリとどんでも無いことを口走る寂園の言葉を聞いて彼女の肩をガツチリと掴み顔を引きつらせる美城常務。

しかし、寂園はそんな彼女の言葉にただただ首をかしげるだけである。

なんて事はない、ハードロックの神様と全米チャート1位を取った伝説的なバンドのギターを練習に使わせてあげてるだけである。

その二つのギターの値段は軽く数百億は越えるというお墨付きではあるが。

「まあ、細かい事は気にしたら負けネーボン(problem

！」

「あなたの細かいはスケールが毎回デカイでしょ…舞」

「あいたつ!?」

そして、すかさずスパンツと寂園の後頭部を軽く叩く凛は目を丸くする美城常務に申し訳なさそうに無理やり寂園の頭を下させ、自分もまた頭を下げる。

いろいろ向こうで寂園がやらかしているようなので、こういつたところでお詫びを入れとかないと申し訳がない気がしたからだ。

美城常務は溜息を吐くと頭を軽く押さえて再びベットに横になりはじめめる。どうやらまだ少し休みが必要なようだ。

「…めんなさいやつぱりもうちよつと休暇を少し貰うわね…頭が痛くなつてきた」

「はい…、どうかお身体を…自愛ください」

「武内くん…大変だろうけれど…大変だろうけれどその娘をよろしくね…」

美城常務は大事な事なので念のため二回言つておいた。

向こうで一体何があつたのか、美城常務がここまで疲弊してしま舅とは寂園は一体何をしてかしたのか。

想像する事しか出来ないがなんとなく彼女の心情を察した武内は顔を引きつらせるばかりであつた。

それから、後日。

美城常務の見舞いを終えた寂園はあるイベントに参加する事にしていた。

凛達に日々の特訓も付けてあげなくてはいけないが、何より、寂園はまだ日本に帰国したばかりである。

そう、息抜きもたまには必要だと考えた彼女は、なんと日本の夏に開かれる一大イベントに神崎蘭子と凛をお供に連れてやって来ていた。

その一大イベントとは。

「英國で生まれた帰国子女の金剛デース！ よろしくお願ひしマース♪」

コミックマーケットというイベントである。

寂園が日本に転生してからというもの一度は来てみたかったイベントであつたのだが、なかなか参加する機会がなかつたので神崎蘭子と共にゲーム関連のものを買いに来た訳だがどういう経緯からかなんとコスプレをする機会を得た寂園はノリノリでそれを行つていた。

普段の頭髪は黒なので、わざわざ、専属のコーディネイターさんを呼び出して髪の毛を一日だけ茶髪に染めたりとやりたい放題である。

「うおおお！ 金剛ちゃんだ！」

「完成度高いぞ！ これ！」

そして、彼女の周りにはいつの間にか人だかりが出来ていて。

しかし、よくよく顔を見ればある程度の人間は気づいてしまうものだ。彼女がどんな人間であるのかという事に。

だが、寂園はそれでもどこ吹く風である。神崎蘭子もまた、コスプレをして寂園の横に並んでいる為、尚更、華がある。

「おい、あれ、神崎蘭子ちゃんじゃないか？」

「というか隣にいるあの金剛ちゃん…、最近ニュースで大々的に取り上げられてる娘だよな！」

コミックマーケットがそれからしばらくして大混乱に陥るにはさほど時間は掛からなかつた。

それを遠目で見ていた凜は思わず頭を抑えている。

付き合つてほしいと寂園から頼まれて来て見れば蘭子とコスプレしてコミックマーケットに来訪すると言いはじめるものだからそう

なるのも領ける。

だが、寂園はと/or>うとそんな周りの人達に誤魔化すようにこんな風に振る舞つていた。

「違うヨー、私金剛デース！ テレビとか知りまセーン！ この娘も蘭子じやなくて離島棲鬼ちゃんだからネー」

「ココマデ…… クルトワ…… ネ」

「o h！ 蘭子ノリノリネー！」

「あんたもう隠す氣ないでしょ」

周りの人だかりの中を押しのけて現れた凛はノリノリでコスプレをしていた寂園に告げる。

仮にもアイドルなのにこうも簡単に人前に出られる寂園の神経の図太さには凛も思わず感服してしまう。

そして、凛の姿を見たその場にいる全員は確信してしまう、そう、今売り出し中のアイドルがコスプレしているという事実に。

「…渋谷凜ちやんだ」

「つて事はやっぱし、金剛ちやんは…」

「それにやっぱり蘭子ちやんだつたんだ！」

「o h…、バレてしまいましたかー、2人とも撤退デース！」

「…舞…あんたはもう…」

「H A H A H A H A ! まさか私の見事な変装がバレるとはネー、さすがはニンジヤの国！」

「…うう…まさかこの様な運命に翻弄される事になろうとは…我が力は未だ未完成」

そう言つて、その場から駆け出し逃走を試みる3人。

そして、しばらくして会場の近くに停めてある車の中に逃げ込むと満足した様に笑みを浮かべていた。

もちろん、抜け目なく戦利品は持ち帰つている。面白いRPGの

ゲームをわざわざコミケ関係者の方から購入し、譲り受けて来たのだ。

「いやー、これで今年の夏は一緒にゲームができますねー蘭子♪」

「ふふふ、実に愉快！ 共に協奏曲を奏でようぞ！」

「…てか、なんで私もこんなのに付き合わなきやなんないの？」

「えー、凛もやろうヨー」

そう言つて、グイグイとゲームを凛の顔に押し付ける寂園。

J R P G を最近するのに嵌つている寂園、今回のコミケに関してもR P G のゲームが目的で蘭子と訪れた。

日本の夏にある一大イベント、R P G のゲーム販売と聞けば面白そうという感じで蘭子を誘つて軽いフットワークで今回参加しに来たわけである。

まあ、結果としては大騒ぎ、人気沸騰中のアイドルが一般人に混ざつてコスプレしてるのでからそういうのも致し方ない。

寂園もなかなかのゲーマーなので、最近は間を持て余すとP C のゲームなんかにも手を出しあげている。

今回の金剛のコスプレはそう言う経緯からだろう。

「やーらーなーいー！ つて言うか特訓は！」

「d o n, t w o r r y ! 明日からしつかりするヨ♪ 今日は

今から蘭子とこれやるネ」

「あなたは…もう…」

「約束だからねー、ね、蘭子♪」

「うむ！ 我が同胞よ！」

そう言つて満面の笑みを溢す蘭子を見た凛は何にも言えなくなってしまった。

流石にこんな顔をしてる蘭子から寂園を取り上げてしまふほど凛も鬼ではない、確かに今日は休暇だと寂園も言つていたし、寂園も帰

国したばかりだ。

仕方ないと諦めた凛はムスつとした表情を浮かべると寂園にこう話し始める。

「…じゃあ私もやろうかな」

「y e s！」

「やった！」

凛の言葉を聞いた蘭子と寂園はにこやかな笑顔を互いに浮かべるとハイタッチを交わす。

こうなつてしまえば話は早い、今後の予定は帰つてから3人でRPGで盛り上がる事に決定だ。

こうして、車で帰路につく中、戦利品を持ち帰った寂園達は3人で帰宅した後にゲームで今日一日を過ごす事にしたのだつた。